295
407

特113
676

佐々木味津三著

長篇小説

二人の異端者

1924

聚芳閣出版

大正
15.10.5
内交

二人の異端者目次

二人の異端者……1
母の上京……155
寂しき復讐……203

二人の異端者

佐々木味津三

大正
15. 10. 5
内交

どの道猫のしッぽにも等しい次男坊の事であるから、頭數をひろつたらざつと十一人と言ふやうな子澤山な兄妹の中に交つて、京作一人が特に群を抜いて親達から特別の取扱ひなぞうけえられる筈はなかつたが、しかし小學校を卒へるとすぐのやうに無理矢理元服させられて、遠い所へ養子に追ひやられた次兄なぞに比べると、まだしも彼の方がずつと親達からはかわいがられた方であつた。

いつたい京作は元來が内氣者で、誰に限らず他所の人から突然名前でも呼びかけられやうものなら、それだけで泣きベソを掻き出しそうないかにも氣の弱いはにかみ屋であつたが、それでゐてしかし甚だ内辨慶外すばりの方で、五黄土星申の年の生れと

言ふ古人の極め書にず分たがわず、實は至つて意地わるの狡猾者で、一端强情を張り出すと、誰彼の差別なく事の善惡にかゝわらず、どこまでも自説を押し通すと言ふへんに意地くねの曲つたところがあつた。

それを買ひ被つたのが父親である。京作のその意地くねの曲つたところと、決して自説を抵げない剛情ッ張りのところを却つてなにか傑物の通有性とでも勘違ひしたものか、幸ひ彼が尋常時分からずつと首席を續けてゐたので、親馬鹿の父親はひどくそれを高く買つて、なにか陸軍の大將にでも仕立てやうと言ふ胸算用から、破格にも京作をわざわざ三十里も隔たつてゐる名古屋の中學に入れたものであつた。

その中學の四年迄は、父親の胸算用が運よくすゞ六の塞の目を引きあてゝ、京作も型通り品行方正學力亦劣らずと言つた陸軍大將式の頗る善良な學生であ〳〵たが、しかし彼が丁度その四年になつた年の春であつた。ふとした境遇の變化から、突然京作の

軌道が左前に傾いて、品行方正が不品行不方正に、學力亦劣らなかつたものが學力共に劣ると言つた具合に、すべての調子が狂ひ出した。

ことの起りは、前年からずつと肺を患つてゐた父親が、まさかと思つてゐたのに、その春ぽつくりと死んで了つたからであつた。

丁度四月の二十七日であつた。春雨がしよぼしよぼと降りしきつてゐる日で、その日の晩方京作は突然くにの長兄から、重い至急親展の封書をうけ取つた。

「……父こと頃日來殊の他容態面白からず候につき この書狀うけ取り次第ともかくも一應御歸鄉可然右申し傳へ候」

見ると手紙は簡單ではあつたが、明らかに容態面白からずと書いてあつた。そして手紙の中には一週間分の缺席屆がちやんと用意されてあつた。

無論病氣が病氣であるから、あらかじめその覺悟を持つてゐないわけではなかつた

が、まのあたり容態面白からずと言ふ文面をうけ取つてみると、流石に京作もうろたへないではゐられなかつた。

どの程度に容態が面白くないのか、それともとうに亡くなつてゐるか、たゞそればかり氣に病み乍ら、いきせき切つて山路を駈け上つた。

ところが父は彼が名古屋を立つた晩に、左り肺結核並に腸結核と言ふ念入りな病名で、僅か四十七歳の短命な生涯を完全に終へてゐたのである。

元より止むをえない時間の上の咀嚼ではあつたが、彼一人だけ死に目に遭へなかつたと言ふこと柄が、先づ第一に彼の心に奇怪なしこりをつくつた。なんとなく彼一人だけが、兄妹からも別な畠につき出されたやうな寂しさゝへかんじられて、不快と同時に萬事が萬事口惜しかつた。

のみならず彼が歸つて一家悉くが完全に頭を揃へたと言ふので、初めて封を切つた

父親の遺言狀の中に、

「……あまたある弟妹のことにも候へば、斯樣なる婆心は元より言ふもおろかに候はんが、性來京作義はあまり馬鹿者とも存ぜられず、少しく金をかけ候はゞなにかにはなりそうな者と相考へ候まゝ、大臣大將とは申す間敷候も、何かひと角の者には御仕立相願度、其許一段のお心なされ候て、特に京作ととお目かけ可然、死にのぞみ乍らも、この一條のみとかく父の煩ひと相成居ることに候」

と言ふ一項があつたのをふと聞くに及んで、突然彼の心は不思議な重壓と動搖にみぶるひ立つた。

遺言狀の一項に、彼の名前だけが特に書き加へられてあつたと言ふ事柄が、第一彼には不氣味であつた。

あまつさへ大臣大將とは申す間敷候も云々と言つた〻句が、死に頻し乍らもなほ生

前父親の煩ひになつてゐたと知ると、不氣味と同時に彼の心は不思議におもくるしかつた。

無論、それらの動搖と重壓は、はつきりと形をとつて指し示されたものではなかつたが、しかし彼は不思議にもその瞬間から、宇宙萬象事々もろもろに對して奇怪な反抗といとわしさをかんじ出した。

一口に言つたら事々物々がこれ迄とはおもむきを變へて、すべてが懷疑的に解釋されてならなかつた。森羅萬象ことごとくがまたにわかに歪んだいびつ物に考へられてならなかつた。

同時に性來の片意地が突如鎌首をもちあげて、無理にもなにかにさからはないではゐられなかつた。

學校がなんだ。と言ふ考がその場に捲き起つたのである。遺言狀がなんでなんだ。

と言ふ考がまた疾忽として化粧立したのである。

そればかりではなかつた。おのれひとりだけ死に目にも遭へなかつたこと柄を反覆すると、長兄初め他の弟妹たち一圓にさへ理屈なく反意が湧いて、ことごとになにか拗ねないではゐられなかつた。

その翌る朝、雨のさなかに滯りなく父親の葬式はとり行はれたが、しかしその埋葬に立會つても不思議に京作は涙一滴さへ流すことが出來なかつた。

刻一刻と地上から姿を失なつてゆく父の棺をみつめてゐると、悲しさよりも寂しさよりも、その死が不用意に置き忘れていつた遺言その他の忘れものをまたこと新らしく考へ出して、むしろ彼は憂鬱ないまわしさに不快さへかんじられてならなかつた。

只茫然とし乍ら、彼も他人にならつて型通り棺のうへゝ大きな土くれを點々と投げかけてやつたに過ぎなかつた。

かたみわけとか、遺産の整理とか、いわゆる死者を弔ふ跡仕末が二日も三日も親族會議の名に依つて繼續されてゐる間は、京作もなんとなく散漫ないとわしさを感じたゞけで、別にこれと言つてはつきりしたそのゞの考へもまとまらないでゐたが、愈々初七日も濟まして、一通りの佛事行事が無事に終つて了ふと、それまでくすねきつてゐた彼の憂鬱といとわしさと動搖は、あらたにはつきりと形をとつて突然退學と言ふ結論をつくつた。

元より深い成算があつてからの結論ではなかつた。只この場合せめて學校でも瘦めたら、なんとか心のわだかまり、憂鬱、いとわしさ、こだわりなぞが、見事一刀兩斷に解決されそうにかんじられたので、言はゞ萬事投げやりな背水の陣から、又一つにはなにかにさからはないではゐられない衝動から、一意彼はその結論をつくつた。

「學校はこれつきりよしますからね」

ある晩、彼は母と兄のねる前で、初めてその問題を切り出した。

「おやぢがなくぜ！」

しかし兄は、遺産相續の財産帳簿をもつたいらしい顏つきで繰り乍ら、かんたんにそれだけ言つたきりであつた。

「おやぢはおやぢ、僕は僕だからね。えゝよしますよ。學校なんか」

「死ぬ匆々だつて言ふに、なにもそんな駄々こねなくたつていゝぢやないか。とにかくおもしろくないな。そんな咄しは……」

言ひ乍ら兄は見向もしないで、ぱちぱち算盤に餘念がなかつた。

「よしますよ。馬鹿らしいからね。よしますよ」

「馬鹿らしいつてなにがそんなに不服だい？」

「みんな不服だからね」

ところが兄はその不服と言つた言葉尻を言下になにか財産上の事實問題にでも當て嵌めて曲解したものか、突然おもてをあげると、

「なにも拗ねるところはないぢやないか。遺言にだつてそう言つてあるしな。學校へ出さんつて言ふんぢやないだからな。おとなしく行つたらよさそうなもんぢやないかい」

言ひ乍ら、稍々からまるやうな言葉をさしはさんだ。

それをきくと、京作は突然ひやりとなつた。元來その懸念については、手紙をうけとつて彼が名古屋から慌てゝ歸へらうとしたとき、道の序でに親戚先の大叔父の家へ立寄つたところ、生前父親が遺言狀を用意してゐたと言ふ話をなにかの序でに大叔父からもきかされたことがあつたので、いわゆる世間の遺言狀が、つねに財産分配云々の問題のみにかゝわつてゐる通例をふと考へついて、その問題の有無を實際に彼は大

叔父に對つてきゝたゞした位であつた。

事實彼の肚としては、もしその場合大叔父の口吻に、少しでも彼の惧れた財産上の項目が遺言狀に散見するらしい見當がついたならば、たゞちに名古屋へ引ゝ返へそうと言ふ氣短かな潔癖さへ抱いた位であつた。幸ひにも父の遺言狀には一言半句もその問題には言及してなかつたが、しかし今彼が只退學すると言つただけで、すでに家兄がそんな風に計算的な臆斷を下したらしい口吻を直接耳に入れてみると、ひどく彼は殘念でたまらなかつた。同時に兄の考へ方が、それ程までに唯物的なのがなんとなく悲しまれてならなかつた。

しかし、彼はなにかまださからはないではゐられなかつた。兄とは限らず誰かにさからつてゐるうちに、おのれ以外の別個な意志によつて、變に退嬰的な一種歪められた歴世に近い現在の心持が、ずるずるにどこかへ押し出されるやうな氣がしてならな

かつた。

「とにかく學校は僕がやめたいからよしますよ」

そして彼は只さからひたい一方から、同じ駄々をこねかへした。

「いけつてたらいけ！　次男坊のくせになにが文句あるんだ！　學費を出さないとでも言ふんならだが、ちやんと遺言通り金もかけるつて言つてるんぢやないか！　つまらんいやがらせ言やアがつて！」

ところが兄は突然言葉を改めて叱りつけた。

それをきくと、彼の心はふたゝびはツとすくみあがつた。やはり兄は、彼のそのすてばちな言辭を只唯物的のみに解釋してゐるらしかつた。なにか財産上の問題について彼が不服を抱いてゞもゐるかのやうな解釋を下してゐるらしかつた。

あらたにそこへ氣がつくと、悚然とし乍ら瞬間のうちに彼は態度をかへた。同時に

不思議な衝動から、

「ぢやいきますよ。學校へだつて丁稚にだつて、いけつてところへいきますよ！」

即座にはつきりと言ひ切つた。

のみならず全然逆な片意地から、わざと頭をくりくりに剃りあげると、翌日と言はずにその夜の深更あてつけがましく夜中立ちをやつた。

しかし、一端歸來したものゝ、父の死以來深く心に喰ひ入つた騷動と憂鬱は、決してそれによつて拔けきらなかつた。

彼は益々いとわしかつた。ことごとに心身が結ぼれてならなかつた。なにかにさからはないではゐられなかつた。

あまつさへ名古屋で京作の歸るのを手ぐすね引き乍ら待ちあぐんでゐたものは、これ迄どほりに品行方正な學生生活そのものではなかつた。無味乾燥にひからびたそれらの正しすぎる生活よりも、むしろそれとは背中合せな放縱と懶惰とそしてまたはなやかな下道の誘惑が、いくつもいくつも大手をひろげ乍ら、彼の歸來に備へられてあつた。

たゞなにかにさからはないではゐられない彼の心は、刻一刻と奇怪な騷動をつゞけ乍ら、是迄まるで蛇蝎のごとくいみきらつてゐた下道の誘惑に、いつのまにか一歩一歩と躍進をこゝろみていつた。

誰に啓發されたともなく、まづ彼はかくれ煙草を吸ふことにひそかな興味をそゝられた。その頃かくれ煙草に屈强な場所は、講武場裏手の土手際であつた。土手には手頃な芝生があつて、春日を浴び乍ら長々とねそべつて煙草をふかすには又とない樂園

であつた。あまつさへその土手ぎわは體操教員の屯所をのぞいては職員室に最も遠いところであつた。

煙草と言へば殆んどその土手際と限られてゐたので、自然そこへ集まるやからたちは、どの道不善良な者ばかりであつた。從つてそこへ出入りする學生たちは一様に職員たちから注目されがちであつた。

そう言ふよこしまな集團の中へ、無警告に彼が飛び入りしたので、人々は期せずして彼一人に不思議なまなこをむけた。しかも彼はその時丁組の金筋であつた。金筋と言ふのはその中學だけの特徴で、成績順に一番から四番までが甲乙丙丁各組の組長で組長は洋服の袖に金モールをつけてゐるのがその頃の制度であつた。

言はゞ學校を代表する秀才であるべき金筋の彼が、いきなり黒表中の集團へ飛び入りしたので、人々のおどろきは格別であつた。

が、しかし彼はそれらの集團へ飛び入りはしたが、なに一つ彼等の輩に習つたものはなかつた。

彼等がぴかぴかに磨きあげられたボツクスの靴を踏み鳴らしてゐるのに、彼だけは平然として、ぼこぼこの兵隊靴を恥ぢなかつた。彼等が折目正しい背廣型に清酒を競つてゐる間に交つて、彼だけはひとり漸然とジヤケツ型の水兵服であつた。

むろし彼等のそう言ふ風な邊服を飾る行爲を目撃すると、自身その集團に足を踏み入れ乍ら、年來のつむじ曲りが手傳つて不思議な反感さへ湧いた。彼等がそれを特權のごとく振舞へば振舞ふほど、反對に彼は意地になつて穴のあいた大黒帽をわざとあみだにかぶり乍ら、よれよれのジヤケツ服で彼等を尻目にかけた。

從つてうはべは立流に不良學生と伍し乍ら、しかし事實はどこまでも一個の異端者であつた。むろん誰一人向ふから胸襟をひらひて彼に話しかけるものはなかつた。彼

も亦決して誰とも口を交へなかつた。

のみならずこれ迄道心堅固時代の話し對手であつた善良型の級友たちからも次第々々に離れ去つた。むしろ日に日に彼等から敬遠され斥けられた。それらの級友たちはまたこぞつて彼を別な意味での異端者として、輕蔑と憫れみを加へてゐるらしかつた。

が、彼は決してそれを顧みなかつた。寂しいともかんじなかつた。それらの昔ながらな生活空氣から、日に日に刻一刻と切り離されてゆくおのれ自身が、却つて彼には明るい氣持で眺められた。

そして今彼は完全にどの點からも局外中立の位置にあつた。どの側からも一個漸然とした異端者の位置にあつた。

しかしその間もなくである。彼の中學にはしなくも一つの大きな事件が捲き起きたそれはマニラのオリンピックに初めて日本から マラソン選手として出場した彼の中

學の一選手が、幸ひにも十哩マラソンに一等をかちえたと言ふ事實であつた。

只一等をかちえたのみであつたら、別に大して事件は捲き起こらなかつたが、これ迄古來教育は日がな年中裸體になつて只俾屋のごとく走つてさへゐたら、それで萬事こと足りると言ふがごとき一微な主奠方針を抱いてゐた彼の中學の校長は、その出爽ごとに依つて殆んど正氣の沙汰を失なふ位有頂天になつた。

丁度その榮冠をかちえた選手が歸國して名古屋へ歸へる日であつた。正氣を逸した校長は、二里も隔たつてゐる郊外の家から裸體のまゝ有頂天でかけつけ乍ら、矢庭に猪突な命令を下すと、その選手を停車場まで迎ひにゆくため、全校生徒を裸體にむいてマラソンで連れ出そうと言ふ計畫を立てた。

ところがその日に限つて、不思議にも校内一圓どこにと言ふことなく期せずして校長の命令を拒むと言ふ風が仄みえた。誰一人先んじて洋服をぬぐものがなかつた。誰

も彼も漫然として手を拱き乍ら、柔順に命令を奉するものがなかつた。たまに一兩人支度をしたものがあつても、いつのまにかまたこそこそと洋服に着かへ直した。

心もよそに初めからそわそわと有頂天であつただけに、校長の狼狽と怒りは格別であつた。あまつさへ時間は刻一刻と押し迫つた。つひにたまりかねたか突然校長は、窮餘の一策として、そのまゝ走れと言ふ一徹な命令を下した。

流石にその命令には誰も彼も萬止むをえなかつた。學生たちは洋服に靴ばきのまゝで、一里あまりを停車場まで否や應なしにマラソンをやらさせられた。

最初の榮冠でもありあまつさへその榮冠をかちえた者が、僅か中學四年位の一青年であつたと言ふやうな關係から、名古屋全市の人氣は湧き返へるやうな騒ぎであつた殆んどその沿道は人垣を以つてうづめられ、ために電車は數時間立往生を餘儀なくさせられた程であつた。

世間の騒ぎが大きいだけに、學生たちの亢奮も初めはそれに準じて只純眞な亢奮だけであつたが、停車場から學校へ、學校から講堂へと、時間が延長されるに從つて、その亢奮も次第次第に揉まれ乍ら、いつか不思議な方向へこぢれ出した。

あまつさへ出發の時の命令がすでに穏やかでなかつた矢先であつた。かてて加へて學生たちは誰も彼も事を好む血氣ざかりの腕白者ばかりであつた。むしろ亢奮のこじれないのが不思議な位であつた。

が、流石に講堂へ這入るまでは、何等危險な兆候もなかつたが、愈々歡迎會が開かれてから、ねぢまげられた亢奮が突如あるかたちを取つて勃發的に捲き起きた。

しかもその直接導火線となつたものは、京作たち四年のクラスを代表して演壇に立つた杉山と言ふ學生が、意外にも歡迎ならで堂々と非歡迎の辭を述べたからであつた

「諸君。吾等は今日世にも歎ずべき出來ごとに偶然出會したことをなによりも悲しま

ねばならぬ……」

劈頭先づ杉山は驚くべき言を吐いた。

「……なる程吾等は今回の榮譽に對して決して愉快の情を禁ずる者ではない。ないがしかし諸君、その歡びに面した背後に呪ふべき歴史があらたにつくられたことは吾等衷心より悲しまざるをえないのである」

なんの憶するところもなく杉山は平然と言葉をついだ。滿場四五年の上級生全部は期せずしてぱちぱちと杉山に拍手を送つた。

「……あらたにつくられた呪ふべき歴史とは、今日吾が校長が執られた非常識な命令である。吾が校長の教育方針がつねにマラソン第一のごとき感のあつたのがすでに大いなる歎ずべき事柄であつたに拘らず、今日吾等はあらたに又奇怪至極な實例を校長によつて指し示された。これがつねなる場合ならばまだしもであるが、白晝人出の今

日のごとき場合に、尙ほ吾等は一人力車夫にもまがふべき歡迎の方法を講ぜなければならないごとく命令されたのは、むしろ呆然自失なんと言ふべきかその言葉に窮する程である……」

杉山は不敵な面魂をし乍ら、ぢろぢろと校長を尻目にかけた。

その瞬間であつた。場内どこからか、突如大音聲で、やッつけろ、やッつけろ、と言ふ意外な聲が空を破つてまき起きた。續いて場内過半の者が、にわかに喊聲をあげ乍ら、一氣にさつと總立になつた。同時に四年五年の大半が揉み合ひ乍ら、期せずして校長の身邊に押し寄せた。その中のある一人が、やにはにまた大音聲で、校長を胴あげしろ、と叫ぶや否や、間も置かないで校長はさながら輕るい手毬のごとくさんざんに弄ばれた。

一端堰を切つておとした學生たちの亢奮は、只それのみに終らなかつた。日頃なに

かと怨嗟をうけた四五の教職員までが、同じ手でしたたかに胴上げの辛い目にあはされた。中には多勢を頼つてうしろから、二三引つぱたたいたり、引つ掻いたり、足蹴にするものさへあつた。のみならず講堂の硝子窓を理由なくしてばりばりと打ち破つたものさへあつた。

歡迎會がそのまゝ變則な結果で終結したのは勿論であつた。がしかし京作は、最初からその騒動にはまるで手を出さなかつた。その結果がおそろしくて、ぢつと身を引いてゐたのではなかつた。また彼等學生たちの行爲が正しいものと解釋出來なかつたが故に、拱手傍觀をしてゐたのではなかつた。

寧ろ彼には最初からその亢奮が起こらなかつた。あまりに竹を割つたごとき愛すべき學生たちの亢奮を感じる前に、なぜか彼には馬鹿らしさと不思議な懐疑がさしはさまれてならなかつた。終始彼の心は無彈力であつた。無反撥であつた。

が、しかしその翌日であつた。

職員會議の結果、事件の元兇と言ふかどで、非歡迎の辭を述べた杉山が、突如無期停學の處分をうけた。

それを知ると、今迄點々と口を緘し乍ら、終始傍觀の態度をとつゐた京作が、にわかに憤然といきり立つたのである。

元來その杉山は京作と同じく丁組の者であつた。成績の上では彼より六七番も下であつたが、平生がいちじるしく無口の方で、どこか人をさげすむやうな圭角があつたので、同じやうに無口者のいぢ曲りな京作とは自然近づく機會がつくられなかつたがしかしその演說をきいてから、にわかに彼は杉山に好感が抱かれ出した。のみならず杉山が處分されたと知ると、全身彼は義心に燃え立つた。

第一杉山を事件の元兇と速斷した學校側の態度そのものが彼には初めから氣に喰は

なかつた。

たとへ杉山がどれ程煽動的な言辭を弄したとしても、若し學生に愛すべき雷同心がなかつたならば、決してかゝる事件は勃發しなかつたに違ひなかつた。またたとへ學生に愛すべき雷同心があつたとしても、若し校長年來の主義方針に、學生の怨嗟をうけるがごとき部分がなかつたならば、杉山も學生も共に決してかやうな事件をまき起こさなかつたに違ひなかつた。

それを思ふと、彼は今回學校のとつた處分を、むしろ學校自らが杉山の言說を立派に裏書するものと解釋を下して、つひに無謀にも單身校長に對つてその處分の撤廢を迫まつた。

「私もマラソン偏重主義には大反對ですー」

彼は不思議な義心に燃え乍ら、敢然と校長に對つて言ひ放つた。

がしかし、かやうな反對がなに程の効も奏しないことは初めから解り切つたこと柄であつた。また一學生の分際で苟しくも校長に楯ついたことが、そのまゝ無事に納まる筈はなかつた。

その同じ日の午後、不都合の行爲あるものとして、京作が又無期停學の處分を、杉山のと肩を並べて麗々しく控室に張り出されたのである。

同時に彼が組長の位置はものの見事に剝奪された。その昔燦然と光り輝いてゐた金筋は、その場に袖から奪ひ取られた。

しかし、彼はその出來ごとを決して歎げなかつた。寧ろ金モールを剝奪されたことによつて、急に一人前の學生になつたかのやうな一種樂々と安神に近いねぢ曲つた愉快さへ覺えた位であつた。

のみならずそれが偶然な端緒になつて、父の死以來ふんだんに蓄めいてゐた貯内の

曇氣が、生彩としてどこからともなく雲散夢消してゆくかのやうにさへかんじられてならなかつた。長年くすね切つてゐた五體の青春が、一氣に戛然と光輝ある陽の下にさらされたやうな喜悅さへかんじられてならなかつた。

鎖は切られた！　彼は誰にともなく呟き乍ら大手を振つて、今金筋を奪ひとられたばかりの兩袖を人々の間にひけらかして歩いた。

無論、クラスの者たちはあの京作がと言ふ風に、おのおの意外と驚愕の色を浮べ乍ら、一樣に彼に對つて憫みのまなざしを投げかけた。

しかし彼は、豪未もそれを耻ぢなかつた。却つて逆に彼等を尻目にかけた。

京作の人が變つた。と言ふ評判を校内で頻々と耳に入れたのはそれからである。また人々からはつきりと憫殺のそしりをうけ出したのもそれが機會であつた。

人々から憫殺はされたが、しかし彼はその代償として杉山と言ふ心からの友達をあ

らたに一人發見することが出來た。

杉山と彼とは互に同氣相求めて、以來頻々と往復を重ねた。

停學處分の解除方も、決して彼等はこちらから學校にせつかなかつた。そう言ふ場合、擔任の教師乃至は又校長が、しばしば高價な敷島をうけとると言ふやうな世上の噂を萬更彼等も耳にしないのではなかつたが、しかし變にねぢ曲つた潔癖心に燃えてゐた杉山と彼とは、頑として裏門傳ひのその方法をさへ選ばなかつた。

學校から出て來いと言ふまでは、二人共斷じて謝罪にさへ足を運ばない決心であつた。

やがて天下は孟春こまやかやな五月のさなかであつた。

濃尾二州の平原はいづこも同じ若葉に燃えて、春日はひとり遲々とうららかであつた。

ある日彼はふと思ひ立つて、下宿から十町とは隔だつてゐない杉山の家を訪れた。停學になつてまだ十日とたたない頃であつた。杉山はその頃叔父に當る辯護士の食客であつた。

彼は勝手知つた庭先から、聲もかけずにしんねんむつりと部屋に通つた。杉山も同じやうにしんねんむつりと無愛想であつた。

しかしその時ふと彼は、机の上に艶めかしい女文字の手紙が、ひろげ放しになつたまゝでほうり出されてあるのに氣がついた。

見るともなしに眼をやると、それには杉山の停學事件に就いて、甚だ女らしくない激賞の言葉が書きつらねられてあつた。

「……營々孜々とノート虫になることばかりが、學生の能事には無之候。私としてはむしろこの出來事を男子欣懷の快事とさへ考へおり候……」

手紙にはそんな文句がかゝれてあつた。

「……學生にして、それも中學の上級生ともあらう程な學生にして、なほ先生の鼻いきばかり伺ふごときやからに候はゞ、むしろたゞちに田園に歸へること肝要に候……」

またそんな風な一見女にもあるまじい奇矯な言辭さへ書きつらねられてあつた。

ところがその最後にいつて、

「……大下京作氏とやら申さる御友人の男らしさは、思ふだに痛快の至りと存ぜられ候」

と言ふ一行が意外にも書き添えられてあつた。讀み乍ら彼は、突然はッと怪しげに胸先がときめいた。

大下と言へば、京作と言へば、明らかに彼自身の姓名であつた。それがどうして知られたか、どう言ふ種類の女性であるか、全然豫氣しなかつただけに、彼の心は名狀の出來がたい混亂に陷ち入つた。いたずらにはげしく胸先がときめいた。耳ねつこまでが、ぱつと眞赤にてれ上つた。

「おい！　お前これ讀んだな！」

眼ざとくそれを察したか、いきなり杉山が聲をかけた。

「うん！」

答へたつもりではあつたが、しかし聲は出なかつた。

「なんだい。赤くなるのよ。御友人の男らしさは思ふだに……思ふだにだつて言ふんだぜ……」

別にからかふと言ふのではなかつたが、それをまた杉山はにやにややり乍ら向き直

つた。

が、彼はまだ一言も答へることが出來なかつた。なに故か益々胸先がかきみだされた。

「ね、君にこの女性を紹介しやうかな。實あね、ぼく君のことまで書いてやつたんだよ。大いに足下が勇敢な學生だつてね。なんの關係もない僕のために一肌ぬいでくれたつてね大でうちんを持つたんさ。それがそのこの通りの思ふだに思ふだにつて言ふことになつたんだがね。どうだい足下に紹介の勞をとらうかな」

ところが杉山は一向に虛心坦懷らしかつた。

しかし彼は、益々答へることが出來なかつた。意久地なくも全身を眞赤にもみぢに染めて、うつむくともなくさしうつむいて了つた。

「心配するところはないよ。彼なかなか一家の見を持つた女性でね。東京の女子大を

出て良妻賢母になりそこねた女なんだ。ぼくと一緒で不遇な境遇に育つたために、要するに少し量見が不善良だつたんだな。敢て才色兼備の方ではないんだが、しかしわるい女性ぢやないんだぜ。きりやうのぞみで一度縁づいた位なんだからな。心配するなよ。ぼくの濃いいとこなんだからな。ここのうちのみうち先なんだがね。それに少し年がいつてゐるしね」

それを杉山は一層虚心平氣らしく、尋ねもしないことまで巨細に渉つて話しかけた。

「……なんだぜそんな男から手紙をもらつたからつて頭からへんに氣をまわすやうな女性ぢやないんだよ。存外さつぱりと淡泊でね。大丈夫その點は請合なんだ。なんなら手紙でもやつてみろよ」

なに故かそんなことまで杉山はまた彼をそそのかした。

その時ふと彼の心に、不思議な興味が疾忽として湧き上つた。

その興味はかつて身にかんじなかつた程、不思議な混亂と魅惑を伴つた興味であつた。

戀ごころ、若しそれが世に謂ふ戀心とでも言ふものならば、無論彼はそれに異議がなかつた。若しまたそれが世に春を知る頃の若者ばかりに許されたあやかなる心の蠱きと言ひうるならば、元より彼はそれに何の異論もさしはさみえなかつた。

それ程に彼の心は不思議な興味にゆりあげられた。

「そうだね。ぢや紹介して貰ふかな」

そして彼はやつとそれだけ言葉を切つた。

「よし、書きたまへ。岐阜縣。土岐郡。豐秋村……」

杉山はよどみなくすぐと言葉を繼いだ。

「豐秋村、大字なんばん地？」

彼も手をふるわし乍ら、鉛筆を走らせた。

「大字牧野川。ふたひやくふたぢうな丶番地。同姓杉山みずゑ。おん年二十四歳……かな。五歳かな。ぼくより五つ上だから何歳かな。君はぼくより一つ下の十九だつたね。そうするとみずゑ女史は芳紀まさに二十五歳だな。……六つ違ひの姉さんか……しかしなんだぜ。時には紹介者に公開しないといけないぜ。ひとりでたのしむなんてべらぼうだからな……」

杉山はなんのわだかまりもなさそうであつた。

しかし彼は虚心平氣になりかねた。仕舞ふがことく仕舞はざるごとく書取つた紙切を叮嚀に折りたゝみ乍ら、そつと机の上に投げ出すと、

「なにもそんなに今からてれ上るなよ。正々堂々とふところへ仕舞ひたまへ」

言ひ乍らまた杉山はからかつた。

彼は不思議にゐたゝまらなくなつて、そのまゝつと立ち上ると、かくすやうに紙切をうちふところに入れ乍ら、いつになくそわそわと座を立つた。

「なんだい。いやに眼色を變へて急ぐね」

うしろから杉山がからかつてゐるのを無下にふりすて乍ら、實際彼はなにものかに追ひ立てられてでもゐるかのやうにせかせかと道を急いだ。

その夜は寢もやらず考へつめた。

見知らぬ女性に手紙なぞを書き送ることが、どんなに非禮であるか、それを先づ彼は考へた。まだ見ぬ女性に手紙なぞ書を送ることが、許しうるかどうか、それを先づ彼は考へた。

手紙をかいたその結果が、どんなになるかそれを又彼は考へつめた。たとへ少しの

やましさはないにしろ、女はそれをなんと解釋するか、ねちやらず彼は端座したまゝで考へつめた。

かりに手紙を書いたとしても——見事女が默殺したなら——それを思ふと彼はたらたらと冷汗をかいた。

しかし彼は、つひに書かないではゐられなかつた。

書いてみたが、もし女がこれを默殺したなら、と考へつくと彼は又たまりかねてつとそれを破りすてた。

がしかし彼は又書かないではゐれなかつた。書いては棄てて、棄てては書いて、そして又書き改め乍ら、若し女がこれを曲解したら、と考へつくと彼は又堪りかねて十度びそれを破りすてた。

がしかしやはり彼は書かないではゐられなかつた。

「手紙一つさしあげ候」

そして彼は五尺にもあまる卷紙のまつたゞ中に、たゞそれだけをちいさく書きつけた。その終りへ大下京作と言ふ四文字を同じやうにちいさく書き足したまゝで、他には何一つ宛名さへも書を添えなかつた。

やがて夜はしらじらと明け切つた。朝あけのまあたらしい春の大氣が、生彩として訪れた。

そつと忍びやかに表へ出ると、人の子ひとり通らない曉の街を三たび四たびとつおいつ往き復へり乍ら、つひに彼は決心のほぞをかためて、眼をつぶり乍ら敢然とそれを郵便函に投げ入れた。

返事の來るのを祈るやうな、又來ないのを祈るやうな、不思議な願ひに躊躇らし乍ら、一時間を八時間に、三時間を一日に、一日を一週間に、二日を十日のやうに長く

かんじ乍ら待ちわびた。

しかし、その四日目の朝であつた。つひに彼は岐阜縣とだけ書いた差し出人の重い封書をうけとつた。

無論差し出人岐阜縣が、彼女であることは一目瞭然であつた。

が、しかし彼は突嗟にそれを破ることにはげしい恐れが湧いてならなかつた。破る前に先づ彼はときあく胸を押さへ乍ら、どんな返事にもおどろかない固い覺悟をつくらうとひたすらに焦つた。がしかし焦れば焦るほど、彼の心はしびれわたるやうにより一層ときめいてならなかつた。それを無理にも押し鎭めやうと焦り乍ら、かたく彼はまなこをとぢると、衷れにも二三回大きな深呼吸をくり返へした。それでもなほ制し切れずに、やがてたま彼は手紙をうやうやしく机の上にのつけると、暫く身を遠のき乍ら端然と靜座を組んだ。

が、どの企ても悉く無効であつた。つひに彼はたまりかねて、貪るごとく封を破つた。またわなわなと手をふるわし乍ら、卷紙を押しひらひた。

しかしその卷紙には、五尺にもあまる程長いその卷紙には彼が書き送つたと同じやうに、まん中にだゞ一行、

「御返事一つさしあげ候」

と書いてあるだけであつた。そして又その終りにいつて鷺堂流の丸い文字で杉山みずゑと言ふ五文字がちいさく書き添えられてあるばかりであつた。

彼が送つたのと同じやうに、他には名宛一字さへ發見することが出來なかつた。がしかし、彼の有頂點は只それだけでも尙思ふべくしてあまりがあつた。彼は五たび七たび手紙を押しひらいて、都度都度にときめきをあらたにし乍ら、杉山みずゑの五文字にあかず眺め入つた。

その夜つひに京作はまた思ひあまつて、二本目の手紙をかいた。しかし手紙には前と同じくたつた一行、

「ふたたび手紙一つさしあげ候」

と書いただけであつた。同じやうに大下京作とかいたばかりで、他には名宛さへ書き足さなかつた。

中二日置いて、差し出人岐阜縣と言ふ名前で同じやうな封書が又屆けられた。手紙にはやはり、

「ふたたび御返事一つさしあげ候」

と書いてあるだけであつた。

その夜京作は矢繼早にまた「みたび手紙一つさしあげ候」を彼女に書き送つた。彼も彼女の「岐阜縣」になぞらへて封筒の裏に「名古屋市」ときねてかいた。

折返へし差し出人岐阜縣からは、「みたび御返事一つさしあげ候」と言ふ手紙が、彼宛に書き送られた。

その四だび目であつた。初めて彼は少し長い手紙をみずゑ宛に書き送つた。長いと言つても別に文句はかき足さなかつた。

「思ひあまれるわが心つつみかくさず申しあぐべくそろ。とは言へ四たび手紙一つさしあぐべくそろと言ふ他は無之そろ」

そして彼はつひに心を決めて、名宛さへはつきりと杉山みずゑ様と書き足した。

それを折り返へしみずゑからは、また追つかけるやうに同じ封書が屆けられた。

「思ひあまれるわが心つつみかくさず申しめぐべくそろ。とは言へ四たび御返事一つさしあぐべくそろと言ふ他は無之そろ」

手紙には同じ文句がかゝれてあつた。しかし初めて手紙には、はつきりと大下京作

様と宛名が書き添えられてあつた。

彼の心は、もはや逸した奔馬のごとくであつた。なに者の力をもつても制御することは出來なかつた。

「只不思議なるよろこびをかんじるのみに候。偽らざるこのよろこびは五たび手紙一つさしあげ候と申しあげずにはゐられなく候」

その夜彼はまた前後もなく五たび目の手紙をかいた。

みずゑからも、また間一髪を容らないで折り返へし返事が屆けられた。ところがなぜかその返事がいつになく繪葉書であつた。その繪葉書も決して只の繪葉書ではなくて、新年おめでとう、とでくの坊がへそをむき出し乍ら相合を崩してゐる繪葉書であつた。

文句はやはり、「只不思議なるよろこびをかんじるのみに候。偽らざるこのよろこび

は五たび御返事一つさしあげ候と申しあげずにはゐられなく候」と書かれてあつたがしかしなぜかその終りにいつて、「この繪葉書水へおつけ下された度候」と言ふ不思議な注意書がごくちいさな文字で書き添えられてあつた。のみならずその注意書のところが、消したるごとく消さざるごとくおぼろに二本ばかり棒が引いてあつた。

彼はそれを何の意味にか解しかね乍らも、即座に繪葉書を水につけた。何か浮繪のやうな仕かけにでもなつてゐるものと思ひこみ乍ら、彼はまたゝきもしないでぢつと水の中の繪葉書に全身の注意を集めた。

しかし、十分過ぎても二十分たつても水の中の繪葉書にはなんの不思議な變化も表れなかつた。いくたび裏返へし乍らすかしてみても、でくの坊は相變らず尾籠なへそをむき出したまゝで、げらげらと相恰を崩してゐるばかりであつた。またいくたび表を返へしてみても、手紙は只不思議なるよろこびをかんじるだけに候と書いてあるだ

けであつた。

瞬間彼は、なにか嘲弄はれてゐるやうな怒りと失望をかんじた。そしていきなり葉書を取つて投げるやうにつまみあげると、ところがその途端であつた。

水にぬれて、つるりと切手がめくれたあとに、意外にもなにかちいさな文字が二行ばかりこまかく書かれてあるのをふと彼は見つけた出した。

殆んど彼は吸ひ寄せられるやうにのぞき込んだ。

ところがその切手貼用のわくの中には、切手をべつたり貼つた跡には、まさしく彼女の丸い文字で、

「知るや知らずやこの戀を」

と言ふ文句が、はつきりと書きしるされてあつたのである。

彼はその場に、ぼろぼろとうれし涙をはふりおとした。そしてまた殆んどうわごと

のやうに、知つてゐます、知つてゐます、とひとり答へ自ら叫び乍ら、激動のあまり部屋の中を躍り歩いた。

若し今天下に千金を以つても尙ほ購ひえないものがあるとすれば、それはまさしくこのよろこびに違ひなかつた。若しまた地上に五千石を以つても猶換へがたいものがあるとすれば、それはまさしくこの感激に違ひなかつた。

そして今彼はおのが行く手に初めて生氣發剌とした輝を見つけ出した。千金を積んでも購ひえないそのよろこびを見つけ出した。光明潮照と輝きみなぐる明るみをおのが行く手に見つけ出した。五千石を以ても猶ほ換へがたいその感激を見つけ出した。

そして彼は、四たび部屋の中を躍り歩き乍ら、ぼろぼろとうれし涙をはふりおとした。

がしかし、彼はこれ迄の不思議な興味が、あざやかに今戀心であつたと知ると、流

石にうしろめたさをかんじないではゐられなかつた。ともかくもそれは彼にとつて初めての出來ことであつた。且つて一度ものぞき得ない世界であつた。それだけに彼はあらたな氣咎が意識されてならなかつた。

その氣咎はやがてまた彼にいくつかな漠然とした道念をいだかしめた。

年上の女に戀することが、果して合理的なこと柄であらうか、と言ふ疑がその通念の一つであつた。

まだ見ぬ女性に戀することが、果して許しえられること柄であらうか、と言ふ疑がまたその道念の二つであつた。

まして十九や二十の若い身空で、すでに女性の彤管を身にひめてゐると言ふこと柄がなにか大きな罪惡ではなからうか、と言ふ疑がその道念の三つであつた。

が、しかし次の瞬間、彼はそれらの道念も氣咎も打ち消す程の激情に再びはげしく

勇氣づけられた。

彼は取るものも取り敢えず表へ駈け出すと、眼を皿にし乍ら大通りの繪葉書屋と言ふ繪葉書屋を片ッ端探しまわつた。數時間を費やしてのちやつと一枚ハートの一とジョッカーとを刷り交ぜたトランプ模樣の繪葉書を見つけ出すと、胸をおどらし乍ら駈け戻つた。

そして繪葉書の裏表にはなに一つ書き足さないで、やはり切手貼用のちいさなわくの中へ、

「われも知るその戀を」

手をふるわし乍らはつきりと書きつけた。

この戀に幸あれー　みたび四たび心に念じ乍ら、やがて彼は眞心こめてべつたりと切手をその上へ貼けた。

表はいつか六月初めの深夜であつた。しじまを破つて春の淫雨がいまだに霏々とたやみなかつた。

昔も立てずに明りを消すと、靜かに彼は庭向の小窓をあけた。庭は深夜の雨に沈んで、そよとの葉風さへ立てなかつた。そくそくと闇にそびゆる二本の榎は、こぐらき深夜に葉なみを揃へ乍ら、共に聲を呑んで彼に祝福をもたらしてゐるがごとくにかんじられた。

彼は靜かに窓枠へ身を投げかけると、おのづからまなこをとぢ乍ら、はげしい胸のときめきをそつとかすかな吐息にもらした。

思へばつひ一月程先の昔に、一度は學校をさへ退ぞかうと迄心に拗ねた憂鬱も、すべていびつに考へられた森羅萬象もろもろも、いつかからりと晴れ渡つて、今彼の行く手は光明漏照嚇々と明るく輝いてかんじられた。ほむべき春はよろこびに充ちあふ

れ乍ら、ちつと靜かに彼を取卷いてゐるがごとくにかんじられた。

なぜとも知らずに流れおちる涙さへぬぐひもやらずふたゝび彼は身をよぢり乍ら、はげしい胸のときめきをそつとかすかな吐息に洩らした。

しかしなにゆゑか二日たつても三日たつても、彼女からはその以後ぱつたりと手紙が屆かなかつた。

彼は次第々々に不安をかんじた。或は葉書のジョッカーが彼女の心を傷つけたのではなからうか、とそんな危惧さへも抱かれた。若しくは彼女の方でうつかりと切手の下のあの一行を見忘れたのではなからうか、と言ふやうにさへもうろたへて考へた。或はその一行を讀んだために、なにか自分をはしたないとでも誤解したのではなから

うか、とさへ彼はうろたへら考へ乍つめた。

ところがてうど六日目の朝であつた。意外にも杉山がひよつくりと彼の下宿を訪れた。

「おい、やつたね」

そして杉山は上りしなに、にやにやと笑ひ乍らだしぬけに聲をかけた。

「なにを？」

彼はとぼけ乍ら訊ね返へした。

「かくすない！　おみ杉山みずゑ女史とこころみてゐるんだろ！」

杉山はなにもかもこころえてゐるかのやうにつけつけと言ひ放つた。

言はれて京作ははツと赤くなつた。同時にあらたな自責が疾忽として胸を衝いた。

且つて彼女のところ番地を教へられた時、確かに彼は杉山から、たまには公開しろよ

と言はれた筈であつた。無論、半ばは笑談まじりであつたが、今はつきりとそれを杉山に詰られると、これまでひたすらにかくし立ててゐたことが流石に咎められてならなかつた。

が、しかし彼はまだ素直に白狀が出來なかつた。

「こころみるとは？」

わざと空とぼけ乍ら訊ね返へした。

「戀だよ！　いつからこころみてゐるんだ！　白狀せい！」

ところが杉山はなぜか急に言葉を强めて開き直つた。

彼はしばらく答へなかつた。うつむくともなくさしうつむいてゐたが、つひに覺悟を決めて面をあげると、

「うん、たしかにやつてゐるんだ！」

思ひ切つて打ちあけた。

「さうだらう。ぼく君がうらやましいよ」

ところが突然杉山はこころもちうなだれ乍ら、急にまた言葉の調子をおとした。

「なぜだ！」

彼もすぐと追つかけた。

「いやなんでもないがね。あゝ言ふ女性が身うち以外にもう一人あつたらと思ふだけさ！」

「ちやなにかい。君は前からかんじてゐたんだな！」

「その點は心配無用なんだ。ぼくは實際十七迄姉弟としてひとつうちに育てられてゐたんだからな。もし君の言ふごとくなにかかんじてゐたとすればそりやなにさ、つまりよく咄しのわかる姉さんがなんとなく思ひに殘ると言つた程度のかんじ方だから

ね。その點は天地神明に誓つても保證するがね。しかし、ぼくはあの姉さんがなつかしいんだ。と言ふことは他にぼく天下の女性を一人も知らないつて言ふ實證になるんだね。そう意味で。もう一人と言ふんだがな……」

言ひ乍ら杉山は突然また調子をひくめて、なにかを空に描きでもするかのやうにさなことを閉ぢ乍ら言葉を切つた。

京作も默つてさしうつむいた。

が、暫くたつと急にまた杉山は調子を變へて、

「それはそれとして、實あ今日君にいいたよりを持つて來たんだがな」

言ひ乍ら向き直つた。

「なんだい？　停學の一件か？」

「馬鹿言ふない。そんなもの出て來いつて言ふまで謝りに行くもんかい。ねえ、みず

る女史が二三日うちに出て來るつて言ふんだよ！」

「出て來る？　名古屋へ？」

「それがさ。なかなか猛烈なきほひ方なんだぜ。かうなんだ……今珍らしくぼくのところへ手紙が屆いてね。理由はなんにもかいてないんだが、とにかく矢も楯もたまらなくなつたから、二三日うちにぜひ會ひに參ります、つてかいてあるんだ……」

「それで？」

京作はたまりかねてつと膝をのり出した。

「まあまて、……でね。ぼくへんな氣がしちやつたんだ。まさかぼくのところに矢も楯もたまらないなんて筋合はないんだからな。ぜひ會ひにまゐられてもまゐられるわけ合がないんだ……そこでぼくの思へらくさ、こいつ馬を射るんだなつてね……」

「ちやなにかい。ぼくのことでも書いてあつたんかい？」

京作は益々せき込み乍ら訊ねかへした。

「勿論さ、つまり考へたんだよ、いつたいあの女性はそんなことつべこべと口にするたぐひではないんだからな。それに君のこないだの樣子ぢやてつきりそれと見當がつくんだからね。おそらく君とこころみてゐるなつて見當がすぐついたわけなんだ。だから敢て馬を射んとしたわけなんだよ。その馬がつまり僕なんだね……大將は……射たくてたまらない大將さまは即ち君さ。よろこべよ。會ひに來るつて言ふんでからね矢も楯もたまらなくてね……」

そこまで聞くと京作は氣恥しさのために、はつとさしうつむいた。

「……またあの女性は來ると言つたら必ずやつて來るんだからな……どこで修業したんか實にその點は勇敢なんだ……うん來るよ……必ず來るよ」

杉山はひとりでなにか感心し乍ら、さかんに自問自答をやつた。

しかし彼は一言も口が利けなかつた。若し杉山の言ふやうに、實際彼女があすにもやつて來たなら、と考へると彼は已に五體が怪しくほてるのを覺えた。

そのまゝ杉山はプイと立ち上つた。

「さいなら」

そしてかんたんに言ひ棄てると、なぜかとつとと梯子段を降りにかゝつた。うろたへ乍ら引き止めるやうに追つかけたのを彼はすげなくふりきり乍ら、

「二三日君は寢れなさそうだね。それで氣違ひになつていいから、おれも十日ばかり寢れなくなつて見たいな。ぢやさいなら、またおいでよ」

呟くやうに言ひ棄てて、とんとんと降りていつた。

そして彼は部屋のまん中にどつかと胡座を掻き乍ら、ひとりではげしく息をはずませた。

果してその翌々日、彼は電報のやうな葉書を彼女からうけ取つた。

「今まゐります」

葉書には大きくそれだけ書いてあつた。スタンプは岐阜午前としてあつた。

彼はそのかんたんな文句から種々様々の胸さわぎをかんじた。

果したどんな女であるか、なんと言つて這入つて來るか、それを想ふと彼はいつときもぢつとしてはゐられなかつた。いくたびか彼は往來から首を出した。ことりと音がしただけでも、慌てて生つばを呑み下し乍ら、玄關口に全身の聞耳立てた。

そのおひる少したつた頃であつた。

「あの……どちらでございましやうか?」

部屋の入口でつつましやかに言つた女の聲にはつと居ずまゐをつくろつた。

「こちらでムいますが……」

と言ふきゝなれた下宿のおかみの聲をまたきゝつけた。

が、しかし彼は、いつおかみがその襖をあけて、いつのまに彼女がそこに立つてゐたかまるで知ることが出來なかつた。

只、全身灼けつくやうなときめきの中で、

「なにも言はないでね」

と言つた彼女の言葉を途切れ途切れに耳にしただけであつた。

——そして彼はいつか身をふるわし乍ら、彼女のかいなにぢつと强く抱きしめられてゐた。

首筋にぽたぽたとそそぎかゝる彼女の涙を、はつきり氣がついたのはおそらくその一時間も三時間ものあとだつたかも知れなかつた。顏に一杯みだれかゝる彼女の髪のこまかく打ちふるへてゐるのを初めて彼が氣のついたのは、それから世界が二まわり

位も夜と晝とを送り迎へたそののちであつたかも知れなかつた。

「わたしがきつとあなたをこんなにしちまつたんだわね……」

はげしい息づかひの下かれ、途切れ途切れに彼女の言葉をはつきりと耳にしたのはこの世がふたたびつくり變へられたそののちの出來事であつたかも知れなかつた。

——そして彼は、彼女の强いかいなにぢつとだきしめられたまゝであつた。

が、やがて彼女はほつとし乍ら立ち上ると、

「またわたしが來るまでは決して杉山の方へは來ないでね？　わかつて？」

なぜか意味あり氣に固く念を押し乍ら、名殘りおしそうに歸り支度をととのへた。

彼は默つてうなづいた。兩眼にきらきらと涙をため乍ら、默つていく度もうなづいた。

その翌日の同じ頃、彼女は又風のごとく彼を訪れた。

そしてまた同じやうに、

「あちらへは來ないでね。わかつて？」

とだけ言ひ棄てると、彼女は風のごとくに立ち歸つた。

京作も同じやうにきらきらと眼に涙をため乍ら、默つていくたびもうなづいた。

その翌日もやはり同じ頃、彼女は風のごとくまた彼を訪れた。

こまかくふるへる髪のみだれを、とどろくかいなの強い力を、同じやうに彼は彼女からうけ取つた。

やがてまたはげしひ息づかひの下から、

「もうあへないのよ。かんにしてね」

と言つた彼女の言葉をとぎれとぎれにはつきりと聞きとつた。

その翌朝、京作は多分名古屋を立ちしなに書いたらしい「さよなら」と言ふかんたんな彼女の葉書をうけ取つた。

それと同時に彼は實に二ケ月半日で、明日より出校すべしと言ふ停學解除の通知をうけとつた。

無論只の停學が二ケ月半にも及んだことは、彼等が共に意氣地を張つて只の一度も謝罪にさへ赴かなかつたのがその原因であつた。

が、しかし彼はその通知をうけとつても、決して心からは悅ばなかつた。むしろ悅ぶ餘裕がなかつた。思ひは只彼女のことで一杯であつた。

たとへ肉體の上の交りは結ばなかつたにしろ、今彼は明らかに品行歴史の上に於て立派な前科者であつた。僅かに唇だけの交歡であつたとは言へ、清淨無垢な彼の長い童貞歴史が、見事に破棄されたことは事實であつた。

破棄された者に、心に汚點を打たれた者に、學業などは元よりおろかなわざであつた。彼が心から停學解除を悦びえないことは、寧ろ自然な結果であつた。序でにもう二三年も停學が續いたら、とそんなことまでも彼は逆上して考へた。

が、しかし登校しないわけには行かなかつた。そして彼は停學解除のあけの朝、彼女が去つたあけの朝、なに喰はぬ顔でそらとぼけ乍ら、ふた月半目に校門をくぐつた

杉山も同じ日から姿をみせた。

「君はよけい學校を怠けたくなつたろ」

彼の顔をみるとすぐ杉山はからかつた。

「無論！」

彼も大きくうけがつた。

「うらやましいなぁ くたばつちまへ！」

「いつしよならな。しかし考へると時々とうつとしくなるね」

「そうでせうよ。わかれてゐるとね」

からかひ乍ら、なぜか杉山は淋しく笑つた。

その三日目に、七月の試驗が初まつた。が、元より彼は一科目として滿足に仕遂げたものはなかつた。殆んど機械的に一日を迎へて、又機械的に一日を過去の頁へ送り去つた。

休暇が來ると、恒例の夏期武術練習をもぢらかして、「神經衰弱治療のためと言ふ名目をこしらへ乍ら、學校をあざむき家兄のまなこをたぶらかして、彼は漂然と木曾路の溫泉へ旅立つた。

しかし漂然と旅立つたとは言へ、少し道を迂回して彼女に遭はうと言ふ下心が、前以つて豫定の中に繰り込まれてあつたことは勿論であつた。

彼は七月末のあるいりつけるやうな熱い日の朝、丸腰に手ぶらのまゝでぶらりと千種驛から中央線にのり込んだ。一汽車おくれて彼のあとを追つかけて來る杉山を待ち合せるために、途中彼は約束のあるさゝやかな一小驛に降り立つた。附近に家とては一軒もないやうな寂れた驛路の並木の下で、ちいちいとかしましい蟬の聲に彼は氣を苛立て乍ら、たつた二時間おくれてやつて來る杉山を待ちかねた。

それからおよそ三時間ばかりたつてから、二人はやがて目的の多治見驛に辿りついた。その日の暮れ方、彼は杉山の家に辿りつく前に、杉山の伸立で暮れかゝる土蔵ケ原の生ひ繁つた夏草を敷き乍ら、半月ぶりにまた彼女と會つた。

もののあやめさへ解らなくなるまで、しつとりと夏草に露をおくまで、彼等は互ひに唇を離さなかつた。

九月が來ても希望に充ちた新學期が訪れても、やはり彼は懶惰な學生に變りなかつた。またやはり胸には形管(とうかん)の貽(おくりもの)を、そつとひめやに抱きしめてゐる不善良な學生に變りなかつた。

その秋、新らしく席順が變つて、京作と杉山は相談でもしたかのやうに、最前列の最末席に肩を並べ乍ら追ひおとされた。しかし彼等は決してそれを歎かなかつた。却つてそれを幸ひにし乍ら、彼等は時間中に暗號の電報をさかんに席から席へ打ち合つた。

「イマカラ、ヤスマウ」

と言ふやうなものが、その電報の中にくりかへされた。

「ミズエイノチ、ウラヤマシカロ」

と言ふやうなものもいくたびかくりかへされた。

只ふたりだけがそんな風に忘け合つてゐるばかりでなく、陰に隅に彼等二人はクラスに於ける横道者の旗頭となつて、ことごとに組全體を使嗾しては、なにか彼等に氣に入らない先生の時間は、まるで騒ぎ暮らすやうなことがまゝ繰り返へされた。

中で最もひどいのはある西洋人の時間であつた。一つはその西洋人が毛唐のくせに尾籠にも日本の美しい少年を好む風があつたので、それを見ききした彼等二人は、一流の片意地な義憤から、本能的になにくれとなく妨げをするのがつねであつた。

それにもまして猾滑なことは、校長がまるでその西洋人に頭の上らないこと柄であつた。なんの理由か、おそらく校長の見解によれば、坊主でも乞食でも西洋人と言へば日本人よりもすぐれた人種に考へられてゐたに違ひなかつた。それかあらぬかどんなに彼がマラソン熱の發作にかゝつて、ひとり元奮し乍ら裸體で學校へ駈けつけた時

でも、若し生憎とどこかに西洋人の時間があれば、すこすごとマラソン命令を引つこましたものであつた。

それをよく知りつくしてゐる杉山と京作は、時でもない時刻に校長の裸體姿を學校のどこかでちらりと瞥見すると、すぐさま組長をそそのかして、マラソンよけから臨時に西洋人の時間をわざとつくらしめた。そのくせ時間中は徹頭徹尾騒いで暮らした

その頃になつて、彼等のクラスに新らしく赴任した長谷川と言ふ教師があつた。

その長谷川先生は、神韻漂々と朝鮮髭を貯へ乍ら、十年一日のごとく着古したとでも思へるやうな古色褪然とした詰襟服を身にまとつて、鼠まなこをしよぼしよぼとしばたたき乍ら、ひよつくりと彼等のクラスを訪れた。しかし手には緯篇三たび崩れた王陽明全集が一冊大切そうに抱えられてあつた。

ところが、その學校にはこれ迄新らしく赴任した教師に對つては、新任の際一度宛

ばたばたと足摺りをやつて歡迎の意を捧げると言ふ奇怪な善風があつた。その長谷川先生も新任である限りやはりその奇怪な歡迎の辭を彼等からうけなければならなかつた。

が、しかしクラス一同の者が、型のごとく靴音を揃へて、ばたばたするずると足摺りをし初めたとき、意外にも先生は、

「ほう。なかなかお元氣ですな。たのもしい。大いにたのもしいですな」

突然、顏色を崩さないで言ひ放つた。

これが普通の教師であつたならば、突然の襲擊に忽ち狼狽し乍ら苦もなく逆上して了ふところを、しかし長谷川先生に限つては泰然自若として眉根一つ動かさなかつたので、學生たちの豫想はすつかり裏切られた。彼等は先生の寛闊なその度量をさへ、却つて皮肉な應酬と言ふ風に身勝手な解釋を下して、淺墓にも先生に對つて急を反感

のための反感を抱き出した。のみならず以來ことごとにその先生一人をいぢめにかゝつた。

或る者は、字の解釋が辭書と間違つてゐると言つていちいち先生に楯ついた。またある者は頁を多くやりすぎると言つては、理由にならぬ理由を楯に取り乍ら、時間ごとに先生をいぢめ上げた。

はては輕聲肅々を朗吟しろとか、多情多恨は康熙字典の何頁にあるのだとか、金色夜叉は支那のどの邊に棲んでゐるのだとか、愚にもつかない質問で惱やました。

が、しかし先生はどんなに悔辱されても、決して顏いろ一つ動かさなかつた。神韻漂々と霧のごとくに漂つてゐる朝鮮髭をしごき乍ら、底の方にしよぼしよぼと落ちくぼんでゐる鼠まなこをしばたゞき乍ら、終始一貫の赤洋服に猫背をまるめ乍ら、釋然として怒りの色を見せなかつた。

にかゝわらず事一たび陽明の學に及ぶと、突然先生は態度を變へて、眼を輝し乍ら熱氣をこめ乍ら、突兀として程朱の亜徒に痛罵の言を浴びせかけた。のみならず此世に陽明の學をさしおいては、取るべき經世の學は一としてないと言ふやうな過激なこと迄、平然として言ひ放つた。須からく覇者の權道を棄てたまへ。王道の德を樹てたまへ、と言ふやうなこと迄、あたり構はず口走つた。

それを說く時の先生はまるで別人の感があつた。常には眠れるごとき鼠まなこが、その時ばかりは炯々と光を放つた。古色褪然としなび切つた赤茄子のごとき先生の五體が、その時ばかりは生彩としてなにものかの潛熱に力强く充滿されたかのごとくにかんじられた。

その風格とその潛熱に先づ動かされたものは大下京作であつた。また杉山昌平であつた。彼等は先生の世と共に濁らざるごとき哲人肌なその風格に、先づ心からの憧憬

をもつた。陽明の學を說く時の充滿した先生の潛熱に、心からの大きな觸感をうけたのため杉山と京作は、屢々級中全體を對手にとつて、先生を中心にし乍ら、相爭ふやうな場合にいくたびか打つかつた。先生の講義を一分でも餘計に謹聽しやうとする彼等二人と、一秒でも早く切りあげやうとするクラス全體との間には、

「馬鹿だまれ！」

「だまれと言ふ奴がだまれ！」

と言ふやうないさかひが屢々くりかへされた。

「ノート蟲！　お前らにこの講義がわかるかッ。引つこんでろ！」

時とするとむきになつて京作がそんな風にいきり立つことがあつた。

「京作やれやれ！　こらげちげち共口惜しかつたら靜かにしろ！」

そんなことを言つてまた杉山がけしかける事があつた。

「なんだ不良少年！　異端者！　つけあがつてまた半年も停學食ふなッ」

中には負けないで彼等二人にしつぺ返へしをする者があつた。

その爭ひは殆んど時間ごとにくりかへされたが、しかし彼等二人が、わけても京作の考へが、先生の潜熱と風格に強く打たれて、次第々々に進路を陽明學的に向け變へたのは爭はれない事實であつた。

その秋十月に入つてから、第何回目かの陸軍特別大演習が、はからずも名古屋を中心に催されることになつた。

折よく彼等の中學が統監部にふり當てられたために、突然豫期しなかつた休暇が、臨時に一箇月程つくられた。

思はぬ休暇に、京作の悦びは格別であつた。雀躍として彼はおどりあがつた。

思へば彼が笈を負つて郷關を出でて以來、家郷の秋に遭はざることすでに三五年であつた。大入山の松茸しめじ、高原の秋の山もみぢ、あそここゝとたけなはな家郷の秋色を想像すると、すでに座し乍ら彼は飛び立つ思ひであつた。

即日彼は梱をまとめて、胸おどらし乍ら歸郷の途に就いた。

家郷の空はどこもかしこも、豫想以上に秋色こまやかであつた。どの山もどの丘ももみぢならぬものはなかつた。山氣はあしたに冷え冷えと丘をかすめて、日ねもす彼は山から谷へ、家郷の秋を探りくらした。

またたく間に一週間はすぎ去つた。いつ終つたともなく四週間はすぎ去つた。

とこあがあと四五日で休暇が終らうとした日の朝であつた。なに氣なく新聞の社會面に眼をやると、突然彼は意想外な出來事に、はつと驚かされた。

見るとそこには中學教師貧苦のために屠腹す、と言ふ大見出しのもとに、漢文の長

谷川先生が自殺したと報導されてあつたからである。

彼は三たびおのれの眼を疑つた。四たび新聞を讀み改めた。が、いくたびそれを讀返へしても、新聞には明らかに中學教師貧苦のために屠腹すと報導されてあつた。

瞬間彼は、聲を放ち乍ら唸り上つた。

果して自殺が事實としても、王陽明のあの長谷川先生が、あの潜熱を持つた長谷川先生が、只貧苦ゆゑに屠腹したとは考へられなかつた。なぜか彼はその原因に大きな疑問がさしはさまれてならなかつた。

彼はぢつとしてゐられなかつた。晏如とし乍ら新聞の記事にのみ頼つてはゐられなかつた。なぜかもつと突きつめた直接原因が知りたかつた。

彼はその翌早朝、蹌踉として名古屋へ立つた。別にその原因を突きつめて探つたからとて、死者には何の足しにならないとは知り乍ら、しかし彼はぢつとしてゐられな

かつた。名古屋へ着いたその足で彼はたゞちに國語の教師と歴史の先生とを訪れた。その人達は、日頃から彼に好意の抱かれる先生たちであつた。どこか學究的に脱俗した先生らしからぬところが、常日頃彼に好もしかつた。

二人の先生からかいつまんで聞かされたところによると、事實は豫想通り貧苦ばかりの屠腹ではなかつた。

その日は丁度演習終了の翌日で、統監部に開かれる講評式參列のために、東西各部隊がくつわを揃へ乍ら、夕づけて入市すると言ふので、それを迎へると言ふ意味から彼等の中學も最寄の學生を狩り立て乍ら歓迎の列に加はつた。無論、長谷川先生も他の先生たちも、學生に交つてその列の中にあつた。

ところが東西どちらかの司令長官であつた長谷川大將が馬上ゆたかに通りかゝつた時である。なにを感じたか日野川校長が、ふと長谷川先生を顧みて、

「君、同じ長谷川でも大將になつた者もあれば一生中學のへつぽこ敎師で終る人間もあるね」

突然、辛辣な皮肉を浴びせかけたそうであつた。

ところが長谷川先生は勞易すると思ひのほか、即座に校長を顧みると、

「そうです。世の中にはずゐ分と日野川と言ふ名字がありますが、どの日野川も日野川と言ふ人間にろくな者はありませんな」

釋然とし乍ら、皮肉り返へしたそうであつた。

その足で長谷川先生は最寄の紙屋へ寄つて特別大きな油紙を一枚買ひ取ると、談笑平日のごとく他の先生たちに伍し乍ら、歸宅したそうであつた。のみならず途中で牛肉を二斤程買ひ整へると、いつになく晴れ々々と大盤振舞の晩餐をとり乍ら、あまつさへ食事のあとで、家内中殘らず近所の活動に赴かしめたそうであつた。

屠腹したのはその夜の深更であつた。最つ先にそれを發見したのはどこかの銀行へ見習に上つてゐるとか言ふ長男だつたそうで、なにか夢うつつに散然とほど走るやうな物音をきゝつけたところから、ふとまなこをあげてそれとなく樣子を伺ふと、いつになく先生の書齋がまつくらな上に、不思議にも鬼氣あたりを拂ふがごときかんじがされたので、いきなり襖をあけ乍ら、スキツチをひねつてみると、すでに先生は命を斷つたあとだつたそうであつた。

校長と皮肉りあつたその足で買ひ整へた油紙を、藏書の一杯積まれた部屋の片隅にしきつめ乍ら、先生は先づ型通り腹を掻き切つた。その上をいく重にも白布でかたく捲き乍ら、先生は端然と靜座したまゝで、こころもちうしろの柱に倚りかゝり乍ら、たゞ一突に咽喉をかき切つてゐたそうである。のみならず血にしみたその短刀を押しかくそうと努力したものか、半ば膝に敷いたまゝで右手は最後までしつかりと束元を

にぎりしめてゐたそうであつた。

背を寄せかけたうしろの柱には、明らかに時事を慨した七絶がなまなまと血書されてあつたそうで、机には整然と積みあげられた陽明全集の上に、一通の遺書が置かれてゐたそうであつた。七絶はその場に官憲の手に依つて塗抹されたそので、遺書も一端官憲の手によつて開封されてから、直接校長に託されたために、何一つ内容に關しては洩されなかつたが、しかし先生の死が、貧苦ばかりでなかつたことは明らかであつた。

無論先生はその覺悟を以て用意周到に油紙を買ひ整へたものに違ひなかつた。しかもそれを求めたのは、歡迎を終えてその歸途であつた。おそらく先生は何者かに對する鬱積、反抗、意氣地、義憤から、從容として死を選んだに違ひなかつた。

彼はおのれの豫想が裏切られなかつたことにひそかな滿足を持つた。日頃みだりに

は怒りを發しなかつた先生の風容が、時に烱々とまなこを輝し乍ら、突兀と事非を難じた先生の陽明熱が、今、その屠腹によつて完全に生かされたやうにさへ感じられた。

が、しかし、開校と同時に校内の同情が日に日に翕然と先生の死に集められてゆくのを見ききすると、彼は固く口を緘して一言もその原因に就いて云爲しなかつた。人々が一様にその死を貧苦ゆゑと即斷してゐる以上は、それがために同情の集められてゐるのを知り乍ら、要らざる容喙をこころみて、彼一人がそれに横車を押す必要は少しもなかつた。寧ろ彼はより以上同情の集まるのを乞ひ願つた。クラスの者が殆んど押しなべて五錢宛であつたものを、彼だけは特にその十倍の錢を送つた。

やがて秋は心なくも暮れて逝つた。

名にし負ふ氣短かな伊吹颪は、西から東へ、北から南へ、ひゆうひゆうと砂塵を揺

き乍ら、日ねもす大路小路を吹暮つた。

校庭のポプラは、葉音を立て乍らかさかさと振りおとされた。

が、なに故か杉山はいつまで經つても、學校に姿を表さなかつた。開校してからものの十日にもなるのに、不思議にその姿を見せなかつた。それとなく叔父の家を訪ねても、杉山の消息は杳として聞かれなかつた。

ところがある冷たい風の吹く日の夕方であつた。

「おい京作！　かんにんしてくれ！　すまなかつた。かんにしてくれ！　かんにしてくれ！」

言ひ乍らその杉山が、突然彼の下宿を訪れた。見ると顏色は蒼然と衰へて、ぜいぜいと苦しそうに息をはづませ乍ら、なぜか手には一箇の藥瓶があつた。

「どうした！」

思はず京作も座り直した。

「わりかつた！　わりかつた！　俺、飛んだことをしたんだ。おんなじ鍋で肉もつついたしな。半分宛煙草も吸つたんだ！　屹度俺、君に病氣を染つしてるんだ！　こらへてくれこらへてくれ……」

言ひ乍ら杉山は又突然眼がしらをうるました。

「なんだ！　はつきり言へ！」

思はず京作も亦襟を正した。

「俺、やられたんだ……」

「やられた？　どこだ！」

「肺なんだ……」

「肺？」

鸚鵡返へしに訊ね乍ら、突然京作は悚然となつた。

「……すまない。すまない。屹度、おれ、君にも染したんだ。それが苦になつてな、今日やつと出て來たんだけど……それ謝りにすぐ停車場から來たんだ……こらへてくれ！　怒らないでくれ！」

言ひ乍ら、杉山は眼がしらをいつぱいにうるませて、ぜいぜいと苦しげに息を切つた。

「馬鹿！　水臭いこと言ふな！　よしんば染つてゐたかつていゝぢやないか！　それよかいつどこで誰から宣告されたんだ！」

「田舎なんだ……」

「ちや藪飛者だな？　何べん診て貰つたんだ！」

「たつた一遍きりたけれどな……」

「馬鹿。一遍位でそんな病氣が確定されるもんか！　悲觀すんな！」

「俺もそう思ひたいんだ……しかし、立派に咯血してるんだからな。少し手おくれだつて言ふんだ……それで安神のためにどこか信用のおける醫者にかゝつてみろつて言はれたんでな……下山博士に屐書を貰つて來たんだけれど……」

言ひ乍ら杉山は力なく言葉を切つた。咯血までしたと聞いては、流石に京作も今は慰める言葉がなかつた。同じやうに力なくうなだれ乍ら、かすかに吐息を洩らすより仕方がなかつた。

そして彼は暗然とまなこをしばたたき乍ら、心にはげしく杉山の不運を呪はないではゐられなかつた。

羅るものに事を缺いて、羅る人間に事を缺いて、この敬すべき杉山が忌はしくも肺を犯されたとあつては、思へば思ふ程呪はないではゐられなかつた。彼までが口惜し

さにたまりかねた。

が、その時であつた。突然杉山は面をあげると、

「しかし、おれ、生きたいんだ。石に嚙りついても長いきしたいんだ……とにかく安神したい。それであす下山病院に行きたいんだが、君一緒にいつてくれんか！」

にはかに元氣を盛り返へしたごとく言葉を變へた。

「よしッ、いかう！」

京作も救はれたやうに力强くうけがつた。

「そうか、ぢや歸へらう。八時までにおれ俥で來るからな」

言ひ置くと杉山はまた元氣よく立ち上つた。が、明らかにそれは空元氣であつた。

鉛子段を拾ひ乍らも、苦し氣にせき込んだ。

「さて！　俥をやとつてやるから！」

見兼　ねて京作は遮ぎつた。

「要らん。大丈夫だ」

「馬鹿。この上風でも引いたらどうするんだ！」

叱るやうに言ひ置くと、すぐ彼は俥を呼んで、無理矢理杉山に當てがつた。

「ぢやあした待つてくれ……」

淋しげな微笑を殘すとやがて杉山の俥は音もなく角を曲つた。

部屋へ歸へると、彼は暗然とし乍ら胡座をかいた。自然に五體が引き締つた。

運命と言ふか定命と言ふか、あまりにいたましい惡戯に、人ごと乍ら呆然とならないではゐられなかつた。

先には崇拜おく能はなかつた長谷川先生の死にあつた。今また彼は肝膽相照した友

を病魔のために奪はれやうとしつつあつた。

考へると彼は自ら悚然とならないではゐられなかつた。

その時であつた。彼ははしなくも杉山が言つた、君に病氣染したかも知れないんだと言ふ言葉を突然はツと思ひ返へした。

「馬鹿な！」

自ら強く否定したが、しかし彼の五體はそれにもましてはげしい恐怖に襲はれた。若し遺傳の學說に信が置けるものならば、彼の父は明らかに同じ病ひに倒れた筈であつた。たとへ病氣そのものの遺傳はないにしろ、體質の上に腺病質の遺傳がないと誰が言へやうぞ！

瞬間、彼は全身粟つぶ立つたやうな汚感をうけた。にはかに胸が壓迫されるやうな感じをうけた。なにか咽喉がいがらつぽくなつたやうにさへ感じられた。

突然、彼は窓を一杯に明け放つと、力强く胸を張り乍ら、續けさまに深呼吸をくりかへした。なほそれでもたまりかねて、いきなり羽織と着類をぬぎすてると、窓から半身を泳がし乍ら、はたはたとそれを空に振つた。

が、どの企ても彼に安神をもたらさなかつた。つひに彼は眼色を變へると、矢庭に帽子をつかみ乍ら、いきせき切つて表へかけ出した。

どこと言つて、無論、醫者にあてはなかつた。とにかく今の場合、醫者と名のつく人でありさへすればそれでよかつた。

木枯にもまがふ伊吹風が、ひゆうひゆうと吹きすさんでゐる夜の街を、彼はいきをはずませ乍ら探しまわつた。

ものの二三十分尋ねあぐんだあとで、やつと彼は「醫」と書かれた赤い軒燈を一つ見つけ出した。が、それはいかにも醫者であつたが、軒燈の下には小兒科及胃腸病專

門、と言ふ看板がかけられてあつた。

しかし、今の場合の彼にとつては、それさへ砂漠の中のオアシスであつた。彼は躊躇なく門をくぐつた。

「急病人です！　急病人です！」

そして彼は前後もなく叫んだ。

「どなたです？」

「僕です！」

「僕？　どちらさまの僕ですか？」

「ここにゐる僕です！」

殆んど彼は逆上に近かつた。

「あゝあなたですか……」

言ひ乍ら、醫者は自身彼を請じあげた。

しかし、彼はまだ平靜に返へらなかつた。

「大丈夫でせうか！　大丈夫でせうか早く診て下さい！」

せつき乍ら、その場に胸を寛げてさし出した。

「ははあなる程ね。少しいけませんな」

が、醫者の言葉は意外であつた。

「いけないんですか！　ほんとですか！」

彼はぐゝりと生つばを呑み乍ら眼色を變へた。

「喰べすぎますね」

いいえ喰べれないんです！」

「ぢや朝になつて胸がつかえるんですか？」

「さうです非常にまづいんです！」
「さうですか、ぢやよほどひどいんですな」
「ひどいでせうか？　そんなに、そんなにひどいでせうか？」
彼はふたたび眼色を變へた。
「しかし、なんですよ。學生にはよくあるんですがね……まだ本當の胃擴張ではないんです……」
「胃ぢやないんです！　胃ぢやないんです！　ここです。胸です。肺です！」
「肺？」
初めて氣がついたもののごとく、醫者は苦笑し乍ら再び聽診器を取つた。が、まもなく打診を終へると、
「誰かにおどされましたね」

言ひ乍ら、にやにやと又笑ひ出した。
「大丈夫でせうか。まだ腐つちやゐないでせうか？」
しかし彼は眞劍であつた。
「さをですな。ま、ちよいちよいとおみきでも召しあがるんですな。浩然の氣も養ふんですな」
が、醫者はこともなげにかんからと笑ひ出した。
「そをですか！　本當に肺は大丈夫ですか！」
しかし彼はなほ念を押さないではゐられなかつた。
「もちろん！　その方は太鼓のやうな判を押して保證しますよ！」
「そをですか。ありがとうこざんした。さいなら」
彼はうれしまぎれに、ろくろく挨拶もしないですぐ表へ飛び出した。

街はまだ伊吹颪であつた。ふところ手をし乍ら自然に彼は口笛を吹かないではゐられなかつた。

翌朝、杉山は八時かつきりに俥で京作の下宿を訪れた。その日は珍らしくぽかぽかと小春日和であつた。

「五六丁のことだから、ぶらぶら歩いていかうか」

言ひ乍ら杉山は俥から降りかけた。

「まて。かへりに歩こう」

遮ぎつて彼も俥を呼んだ。しかし彼は、昨夜眠色を變へ乍ら、醫者のところへ駈けつけたことなぞはまるでおくびにも出さなかつた。

病院はてうど外來患者の出さかる時刻で、彼等は六十何番かの札であつた。が、幸

ひにも田舍からの展書が利いて、三分とたゝないうちに、杉山は呼び入れられた。附添と言ふ名目で、京作もあとに隨つた。

廣い診察室には、四五人の患者たちが、石のごとく默々とうなだれ乍ら、互に順番を待つてゐた。ある者は帶をとき乍ら、ある者はそのまも苦しげにせき込み乍ら、どの人たちも悄然と蒼白な面を並べて、誰一人生氣のある者はなかつた。

ちらりと一瞥しただけで、なにか彼は慄然と身震ひしないではゐられなかつた。がしかし彼は杉山のために、無理にも氣を惹き立てた。

「どうだい。おやぢにだつて滅多に見せない肌を人さまの眼の前にさらすんだぜ。病人の光榮だな」

さも談笑平日のごとくわざと空景氣をつけた。

やがて杉山の順番であつた。

博士はぺんぺんと大きな腹をつき出し乍ら、

「ど友人ですか？」

物なれた言葉つきで、京作をかへりみた。

「そをです」

彼も輕く目禮し乍ら、杉山のうしろへまわつた。

胸から肩へ、肩から背中へ、克明な診察がくりかへされた。彼は片唾を呑み乍ら、片時もまなこを放さなかつた。

が、その時なんと思つたか博士は突然面をあげると、意味ありげに彼の方へちらりと視線を投げかけた。

瞬間彼ははつとなつた。おそらく博士は病氣についてなにか言ひたかつたに違ひなかつた。しかし彼はそれを正直に言はれることをひたすらにおそれた。科學者として

それをひたむきに隱蔽することが、どれ程大きな不忠實であつたとしても、その一言の如何によつてどんなに杉山が落膽するか、又いかに杉山が希望をつなぐか、それを思ふと京作は今病人を目前において、ろくつに言はれることをひたすらに恐れないではゐられなかつた。

「言はないで下さい！　默つて下さい！」

殆んど彼は手を合せんばかりに、それとなく博士へ注意を送つた。

博士は即座に彼の苦衷を察したものか、たのもしげに大きくうなづいてみせると、靜かに杉山をうしろ向きにさせ乍ら、右の背中に二錢銅貨大の丸を描いてみせた。

ふたたび彼ははつとなつた。がまもなく、

「養生の仕やうではこの位な病氣治つた實例はいくらでもあるからね。みつちりと靜養するんですな。どうですどこかあつたかい海岸へでも轉地しては」

と言つた博士の言葉を耳に入れて、なぜか彼はほつと救はれたやうにかんじた。

が、杉山はうなづいただけで一言も答へなかつた。

歸路、彼は杉山の氣分をいく分でも引き立たせんために、わざと俥をとらなかつた。道々あるき乍らも、彼はつとめて談笑平日のごとく話しかけた。

しかし杉山はかたく口を噤んで、京作の下宿へかへりつくまで一言も言葉を交へなかつた。

「仕方がない……おれ、海へいこう……」

ぐつたりとからだを投げ出し乍ら、やがて杉山は力なく言つた。

「なんぢやい。君らしくもない悲觀しやあがつて。しつかりしろ！　誰もそんなにわりいつて言やアしなかつたぢやないか！」

友だちを僞わることが、どんなに大きな罪惡であつたとしても、しかし彼はうそに

も空元氣をつけないではゐられなかつた。

「ありがたう。君のこゝろもちはよくわかるんだ……しかし、おれ、醫者がなんて言つたか君の目付でよくわかつたんだ……背中へまるをかいたことも氣がついてたんだ……仕方がない……あすにもおれ、蒲郡へいこう……」

ところが杉山はなにもかもちやんと覺悟がついてゐるらしかつた。

が、京作は無理にも自說を押し通さないではゐられなかつた。

「それだからつてちつとも悲觀することはないぢやないか。俺が保證するんぢやないんだ。みつちり養生したら治るつて醫者が言つてるんだ。いきたまへ。早速蒲郡へいきたまへ、蒲郡なら幸ひ知つた宿屋があるから、どこかゆつくりおちつきたまへ」

言ひ乍ら彼はある知合の宿屋宛にかんたんな紹介狀をかいた。その宿屋は京作の父が在世以來の久しい馴染であつた。

「ちや、あした二時の汽車でたとう。驛まで來てくれないか」
言ひおくと、やがて杉山は立ち上つた。
翌日京作は約束通り二時までに、笹島驛へ赴いた。
杉山は毛布一枚と小さなバスケットをたつた一つ携へたきりで、待合室にしよんぼりと佇んでゐた。
「君ひとりか？　誰もついていかないんか？」
意外に思ひ乍ら京作は聲をかけた。
「うん！　附いていつてくれる人もないしな。しかし長くゐるやうにでもなつたら、くにからおばあさんでも呼ぶんだ」
言ひ乍ら、杉山は悲しみを押しかくすやうに寂しく笑つた。
いつであつたか、家郷の方が思はしくないところから、現在叔父の家に居候をして

ゐると言つた杉山の言葉をふと思ひ出して、人ごと乍ら京作は暗然とならないではゐられなかつた。
が、やがて彼は腰をあげると、杉山を促し乍ら荷物を持つて先に立つた。
沼津行であるためか、どの箱も空席ばかりであつた。なるべく煤煙のかゝらなさそうな座席を選んで、彼はなにくれとなく毛布なぞの面倒を見てやつた。
「これ、のどでも乾いたら用ひたまへ」
言ひ乍ら彼は一携げの水柿を購つて窓からさし入れてやつた。
「君は……相變らずみずゑ女史とこゝろみることだらうな……」
籠をうけとり乍ら、杉山は急に元氣らしく笑談を言つた。
「馬鹿、ひとの心配するひまにうんとさかなでも食ひたまへ！」
答へてゐるまに、やがて汽車は動き出した。

「當分天下泰平で辛棒しろよ。くだらんこと考へんな！」
怨に倚りそつてそれを追つかけ乍ら、彼はまたかたく念を押した。
「ありがたう」
答へ乍ら、しかし、杉山のまなこにはきら〳〵と涙が光つた。
彼はくるりと背を向けた。

まもなく杉山からは、宿屋の世話で二間程の別莊に引き移つたと言ふしらせがあつた。くにからおばあさんを呼び寄せたと言ふことも書き添えられてあつた。
それと同時にみずゑからもまた文通があつた。
「昌平蒲郡へ赴き候由、御胸中さぞかしとさつしあげ候。せめてもの御慰ぐみに毎日

手紙一つ宛さしあぐべく候」
と言ふやうなことが書かれてあつた。その言葉通り正確に彼女からは、日に一本宛の手紙が屆いた。
同じやうに蒲郡の杉山からも、殆んど一日おき位に葉書か封書かの手紙が屆けられた。
「われ、日ねもすさかなを食らひ、日ねもす君を思ふ。されど海は寂し。寂しければまたわれ日ねもす海にいでて脊中をあぶる。君來たらずや」
ある葉書にはそんな文句がかゝれてあつた。その隣りへいつて、痩せた男が棒のやうな兩脚を投げ出し乍ら、炎天に日を浴びてゐる畫がかゝれてあつた。投げ出された足のそばには、眼ばかり大きいどぜうのやうなさがなか四五匹書かれてあつた。
「これ、僕の食ふさかな也」

さかなの傍にはまた割註が施してあつた。

「まゐるべきか。まゐるまじきか。まゐるまじくばその樣を申せ。昌平にもはからふ旨あり」

しげ〳〵と蒲郡行を促され乍ら、一言も京作が答へなかつたので、ある葉書にはまたそんな文句が書かれてあつた。

やがてまた冬の試驗が訪れた。

杉山に去られて以來、まるで彈力を失なつた京作が、試驗なぞ一日として滿足に果される筈がなかつた。苦汁でもなめさせられてゐるやうな不快を忍び乍ら、辛じて彼はその一週間を送り去つた。

その日、たゞちに彼は旅裝をとゝのへると、

「キミヲタヅネテ、ワレイマキシヤニノル、タノシンデマテ」

先づ電報で杉山をよろこばした。そして彼はいそ〳〵とし乍ら、四時かつきりの汽車にのつた。

しかし、彼には連があつた。連と言ふのは同鄕の者で、彼には遠い親戚先の小父であつた。折あしくその前後に名古屋へやつて來たために、家兄はなぜか彼の旅費をその小父に托したまゝであつた。なかなかその小父が旅費を托されたまゝ直接彼に渡さなかつた。

そのため彼は一端蒲郡へ下車したとしても、その夜のうちに小父のあとを追つて是が非でも豐橋まで行かなければならなかつた。彼にはそれがなによりの氣がゝりであつた。が、しかし彼は止むをえなかつた。泊ることが出來ないと言つたら、どんなに杉山が失望するだらうことを恐れ乍ら、やがて彼は六時近くにともかくも蒲郡の驛へ降りた。

驛へ降りると杉山がさも待ちきれなさそうにてうちんを片手にし乍ら、改札口のところに立つてゐたのをふと見屆けて、瞬間彼はひやりとなつた。

襟巻に深く顔をうづめ乍ら、充分身ごしらへはしてゐたものの、しかしおもては蒲郡特有の肌にしみるやうなからつ風であつた。その風を犯し乍ら、遠いところへ無思慮にも出あるきしたことを思ふと、あまりに無暴な杉山の行爲に、瞬間彼はうれしさ以上の怒りを覺えた。

「馬鹿だな。ちやんと寄ることは判つてゐた筈ぢやないか！」

そして彼は思はずたしなめるやうに叱りつけた。

「怒んな。怒んな。おれ、もう、まちきれなかつたんだ。おばあさんとけんくわしてやつて來たんだ……しかしよくやつて來たな。もうえゝ、もうこれで安神だ。さあいこう、さあいこう、」

が、杉山はまるで彼の言葉をきかなかつた。言ひ乍らも、心そこうれしそうに、兩眼をきらきらと一杯にうるませた。

「よしわかつたわかつた。その代り俥でかへるんだぜ」

仕方なく彼も苦笑しないではゐられなかつた。しかし杉山はそれをさへ肯じなかつた。眼にしみる程の冷い風を犯し乍ら、てうちんをまたぐらにかゝえ込んで、てんてんと先へ立つて歩き出した。

仕方なく彼も杉山の影をひろつていつた。歩き乍ら杉山ははげしくせき入つた。それをおもんばかつて、わざと彼が歩をゆるめると、却つて杉山は立ち止り乍ら、ぜいぜいといきを切らし切らし彼を促した。

海岸よりの街角を左に折れて、ものの七八丁も行つたところが、杉山の借りてゐる別莊であつた。

右はすぐと海の砂濱であつた。左は暗い水田であつた。その眞んなかの坦々とした道の兩側は、いちめんの松林であつた。松林には嘯々と松籟が高鳴つてゐた。

「おばあさん！　京作だよ！　大下が來たんだよ！」

殆んど歡聲に近い聲をあげ乍ら、杉山は提灯の火さへつけたまゝで座敷にまろび上つた。

「御馳走だ御馳走だ。約束のものを早くおくれ！」

言ひ乍ら半身を泳がすと、その間も待ちきれなさそうに立ち上つて、自身杉山は皿小鉢などをさげ出した。

「茶餉臺をかこむのも久しぶりだな。もう安神だ。さあ食はう。さあ食はう」

そしてまた杉山は心そこうれしそうに箸をとつた。

しかし、彼ははつとなつた。着いてからなにくれとなく心配させるのをおもんばかつて、ほんの少し前汽車中で攝つたばかりであつた。が、杉山のいかにもうれしげな容子を見ると、つひ釣りこまれて彼も同じやうに箸をとらないではゐられなかつた。

やがて箸をおくと、杉山はまたなんの疑ひもなさそうに、

「ふとんもちやんと用意してあるんだ。君、二三日泊つてゆくね」

晴れ晴れと聲をかけた。

再び彼ははつとなつた。

「だめだ！」

そしてなかば口に出しかけた。が、なんの疑ひもなさそうに、終始滿足げな杉山の容子をみると、流石に彼は言葉を濁らさないではゐられなかつた。

「さあね。どうしたものかな」

「ここまで來て駄々こねるない。おれ、そのつもりでゐたんだ」

それを杉山は少しも信じて疑はなかつた。彼は不思議な當惑に身をえぐられた。思ひ切つて、泊らうかとも思はないではなかつた。泊れば無論、旅費に窮することは明らかであつた。それを杉山に借りられたならば何の故障もなかつたが、しかし、現在叔父の袖にすがつてこの生活をさへ續けてゐるやうな杉山の現狀を考へると、彼はなんのこだわりもなくそれを切り出すことは出來なかつた。

その間も時間は遠慮なく經つた。あと十一時何分かの汽車をのぞいては悉く急行であつた。朝早く出かけるとしても、小父と約束した豐川線の一番に間に合ふやうな列車は一つもなかつた。

「とにかく今晩はかへらう！」

つひに彼は立ち上つた。

「かへる？　馬鹿言ふない。たのむから、一晩でいいから、泊れ」

にはかに杉山はうろたへ乍ら引き止めた。

「こらへてくれ！　どうしてもかへらなくちやならない理由があるんだ。來年は、お正月はきつと泊りがけで寄らう！」

氣休めばかりでなく心から彼はそれを誓つて、決然とふり切つた。

「そをか……」

言つたまゝ杉山はぽつくりと言葉を切つた。心なしかそのまなざしは、涙にうるんでみえた。

しかし、彼は心を鬼にし乍ら、そそくさと靴をはいた。

追はれるやうに表へ出ると、眼をつぶり乍ら彼は一散に足を早めた。それを嘲笑ふやうに嘯々と松籟が高鳴つた。

正月が濟むと彼は約束通り蒲郡へ立寄る豫定をつくつて、二三日早目に家を出る覺悟であつた。そのため餘分な金もちやんとこしらへておいた。

ところがその五日の晩であつた。

「モンダイオキタ、アスヨルマデニ名古屋ヘコイ」

と言ふ電報を突然彼は岐阜のみずゑからうけとつた。

彼の心は忽ちにまた錯亂しないではゐられなかつた。みずゑの招致に隨へば無論杉山との約束は蹂み躙じられねばなかつた。杉山との約束を履行すれば、勢ひみずゑには背かなければならなかつた。

左すべきか、右すべきか、彼は電報をみつめ乍ら、いつか二人を心の秤りにかけた。が、しかし結果は元より明らかであつた。そのためどれだけ杉山を傷つけたとしてもたとへいか程世を狹めたとしても、彼はみずゑに隨ひたかつた。

その翌早朝、つひに彼は名古屋へ立つた。

みずゑは人ごみに揉まれ乍ら、ビロードの襟卷に顏をうづめて、きわ立つて白いおもてをちつとこちらへ向けてゐた。

通りすがりにちらりとまなこで合圖をすると彼女は先へ立つて輕々と停へのつた。

「あの停の行く方へ」

そつと車夫に囁くと、人目の關をさけ乍ら、彼もすばやく幌をかけさせた。二三十間の間隔を置き乍ら、彼の停はえいほいと威勢よく彼女のあとを追つた。

どこへ行くか、それさへ彼には解らなかつた。なんの目的でいさなつて行くか、それも彼には判らなかつた。が、しかし彼の心は、なにか用意された幸福の豫感に終始そわそわと高鳴つた。

二三十分も經つてから、やがて停は別々に梶棒をおろされた。しかしそこは矢張彼

の下宿であつた。みすゞはすべてをちやんと心得てゐるかのやうに振舞ひ乍ら、遠慮もなくとんとんと上つていつた。

「電報おどろいたでしよ。……ほんとうはね。會ひたかつたのよ」

言ひ乍ら自分の住ひにでも來たかのごとく先へ立つて座布團をつくろつた。

しかし彼はその言葉を憎めなかつた。甘やかされるやうな幸福にひたり乍ら、すべて彼女の意のまゝに隨はないではゐられなかつた。

彼もみすゞもそれつきり一言も交へなかつた。ちいさな火鉢をはさみ乍ら、默々と口を緘して、かたみちがひにいつまでも灰を掻きならしてゐた。

九時が鳴つた。

十時が鳴つた。

やがてまた十一時が鳴つた。

しかも彼女は、なぜか少しも歸へらうとしなかつた。ちつとうつむき乍ら、なにものかを強く求めるやうに、次第々々に息をはずませた。

突然彼はある豫想を空に描いて、心身が慄然と粟粒立つた。

恐れ……悦び……不思議ななやましさに彼の舌の先はこわばつた。怪しく胸がときめいた。

「下さい……下さい……わたしに下さい……」

途切れ途切れに囁いた彼女の言葉をまもなく彼は耳に入れた。

やがてまた彼は、五體の先がわななくやうな喜悦にあつた。

なぜか彼女は、身をよぢり乍らすすり泣いた。

彼も喜悦にむせび乍ら、ぢつと彼女の自由になつた。

その夜彼は犯された。滿二十歳の春は、つひに彼女によつて完全に奪はれた。

おひる近くになつてから、やつと彼女は起き上ると、疲れたもののごとくほつれ毛をかきあげ乍ら、コートを羽織つた。

「ちよつといつて來るからね」

どこへとも告げないで、すべてを心得てゐるかのやうに、音もなく降りていつた。

夜が來るといつかへつたともなく、彼女はこつそりと忍び入つた。

しかし彼女はなぜかぢつとうなだれ乍ら、一言も話しかけなかつた。

「もつと……もつと……」

喘ぎ乍ら彼女は口走つた。

彼はかすかに全身のしびれるのを知つた。

朝が來ると、彼女は同じやうに默々と身支度をととのへた。

「仕方がないわねえ」

そして呟くやうに言ひ棄てると、力なく降りていつた。

夜が來ると、また彼女はいつかへつたともなくこつそりと忍び入つた。

「ねえ。あなた乾度不思議に思つてらつしやるわねえ」

しかし彼女はその夜に限つていつになく口を切つた。

「なぜです……」

まだ彼が答へないうちに、なぜか彼女は、突然彼の胸さきにおもてをふせると、

「……わたし……ほしかつたんです……誰にもとられたくなかつたんです……」

言ひ乍ら、はげしくすすり泣いた。

「言つて下さい！　はつきり言つて下さい！」

わななき乍ら、彼も耳に口をよせた。

「言ひます……言ひます……わたし……わたし……またおよめに行かなくちやならないんです……行くなら……行くくらゐなら……わたし……わたし……あなたの……それがほしかつたんです……わたし一度もそんな幸福をもつたことがなかつたんです……こらへて下さい！　怒らないで下さい！」

袖におもてをうづめ乍ら、彼女はまたはげしくむせび泣いた。

突然彼は、彈かれるごとくそのおもてを胸さきから押しやつた。そしてまた誰にともなくさからひたいやうな口惜しさがこみあげた。

おそらく彼女は初めからその氣で彼を弄んだに違ひなかつた。いづれはまた嫁がなければならないことを知り乍ら、ほんの當座の慰みに選んだものに違ひなかつた。と思ふとまたあらたに口惜しさがこみあげた。

「お嫁にでもなんにでも、とつととゐらつしやい！」

そして彼はいつになくはつきりと彼女にさからつた。

が、その言葉の下でふとまた彼はあらたな考へに襲はれた。もし彼女の言葉に嘘偽りがなかつたならば、たとへ一度は嫁いだ經驗があつたとしても、眞實これが彼女にとつて初めての戀だつたかも知れなかつた。

嫁がねばならぬ年上への女、また年上への女と初めての戀、誰にもとられたくないと言つた彼女の言葉――眞實彼女は彼のその童貞がほしかつたに違ひなかつた。完全に彼女一人でそれが所有したかつたに違ひなかつた。

『わたし……あなたのそれがほしかつたんです……一度もそんな幸福もつたことがなかつたんです……』

喘ぎ乍ら囁いた彼女の言葉が、初めて彼にも薄々乍ら解釋がついた。

「さしあげます！　どんだけでもさしあげます！　どんなにでもして下さい！」

そして彼はいつか自身むせび乍ら、そつと彼女の面をおのれの胸さきに抱きしめた。肌にまで泌み入るやうな彼女の涙を、まもなく彼はおのれの胸先にはつきり感じた。

「ねえ、今日はどうしても叔父さんに行くか行かないかお嫁の返事しなくちゃならな

い日なのよ。ともかくいつて來ますからね……」

言ひ乍ら彼女は起き上ると、前日通り身支度をととのえ乍ら、音も立てずに降りていつた。

が、夜が來ると彼女はまた風のごとくにこつそりと忍び入つた。

「……やつぱりだめだわ……そんな返事わたしに出來ないですもの……」

そしてぺたりと彼の枕元にかしこまつた。

「……ねえ……わたし叔父さんからお嫁に行けつて言はれたときそを言つておいたのよ……わたしの一存でいかないから相談に三河のお友達を呼びますつて……そいで電報を打つたんでしよ……だから毎日わたしの顏をみると、ゆんべもお友達はお嫁に行けつて言はなかつたかつて叔父さんおつしやるのよ……今日なぞずゐ分皮肉言つたわ、お前のお友達、お前に似てずゐ分氣が長いなつて……とんだ氣の長いお友達ねえ

……」

座り乍ら彼女はまたいつになく愉快そうに笑ひこけた。

ふと彼もなにか安易なこころもちを覺えて、

「ちやあしたは言ふんだね。三河のお友達も行きなさいと言つたつて……」

なに氣なく心にもない笑談を言つた。

「あら……！」

ところが彼女はなぜか突然彈じかれたごとく身を引いた。

「ずゐ分ね……」

言ひ乍ら、またみるまに兩眼をうるませた。が、三分とたゝないうちにふと立ち上ると、いきなり下へ降りていつた。やがて玄關の硝子戸が開けられた。

彼ははつとうろたへ上つた。しかしそこには彼女がつひ今の先まで用ひてゐた黑い

ビロードの肩掛が投げ出されたまゝであつた。無論、歸へるものと信じ乍ら、暫く彼はぢつと樣子を伺つた。

が、五分經つても彼女は歸へらなかつた。

七分たつても歸へらなかつた。

やがて十二分たつても、歸へる氣配がなかつた。

彼はふたたびうろたへ乍ら、起き上りざまに着物を羽織ると、眼色を變へて駈けおりた。

しかし彼女は、おもてのどこにも見當らなかつた。

それつきりつひに彼女は、二度とふたたび彼の下宿に姿を現さなかつた。岐阜へかへつたものか、まだ名古屋に滯在中か、それさへなんの音沙汰もなかつた。元より結婚の問題がどう決つたか、皆目消息が解らなかつた。

彼は狂氣したかのごとくうろたへ乍ら、毎日毎夜その消息を待ちあぐんだ。

それを更に搔きみだすやうに、蒲郡の杉山からは、彼の破約を怒つた手紙を送りつけられた。

「おれ、きみを呪ふ」

葉書には大きな字でべたべたと書きなぐつてあつた。

どんなに呪つてゐるか、彼はその葉書から杉山の怒りを想像しないではゐられなかつた。あらたな自責が、彼の全身を取り卷いた。日夜その後悔のために、彼は轉々と身を挾ぐられた。

しかし彼は今杉山の怒りを知つて、それをくどくどと辯解するおろかを恥ぢた。むしろ辯解をする位なら、彼は二三日泊りがけで蒲郡へ行きたかつた。

が、彼にはそれをさへ行爲の上に斷固と表はす程の勇氣が起らなかつた。心身は

みすゑの消息で一杯であつた。哀れにも彼の心は日に日に刻一刻と、うつろに虫ばまれていつた。

元より學業なぞは、一として身にしみるものはなかつた。どれもこれも砂を嚙むごとく無味乾燥であつた。

いにしへ以上に彈力のない日が、また幾日も幾日も續けられた。むしろ今の彼は、おろかにも禁斷の果實を喙んだために、いにしへにもまして日にち日にちがうつとしかつた。

彼はさながら夢遊病者のごとく、ふらふらと校門をくぐつた。

寸時を盜んではまたいにしへのごとく講武場の裏土手にいつて、ぽつねんと煙草を吸つた。

氣に入らない科目は、なにかと口實を設けて、時間半ばに席を立つた。そのたびど

とに彼の虫歯は、彼の頭痛は、いつも調法に痛み出した。

やがてまた彼のポケツトには、教科書の代りに何冊かの小説本が取りかへ取りかへ忍ばされた。

二點間の最短距離は云々と言ふ奴が、先づ最つ先に教科書の中から斥けられた。A プラスB いこうるなんとかと言ふ奴がその次に排斥された。

そして今こそ彼は立派に一人前の札附であつた。

が、いつまでたつてもみずゑからは、何の消息も屆かなかつた。何故か同じやうに蒲郡の杉山からもそのごまるで音沙汰がなかつた。

しかし、風は日に日に冷さを失なつていつた。

校庭のまうらから突兀として仰がれる御嶽の山には次第に雪が薄らいだ。

やがてまた學生たちは目前にさしせまつた學年試驗のために、誰も彼もせわしげな日を送らなければならなかつた。

ところが試驗三日前の夕方であつた。

「ここへ家を借りた。やつて來い」

と言ふ葉書を突然彼は杉山からうけ取つた。見るといつ杉山は蒲郡を引上げて名古屋のそこへ移つたのか、ところ番地は明らかに學校の近くであつた。

彼は不審を抱き乍ら、すぐ駈けつけた。

杉山が借りてゐると言ふ家は、不景氣な洋服屋の二階二間であつた。

「おれ、もう二度とふたたび蒲郡なんぞ行くもんけえい」

言ひ乍ら、杉山は初めからなにかにひどく亢奮したおももちであつた。

しかし彼はあまりにあたりの陰氣な容子に、先づどぎもをぬかれないではゐられなかつた。天井の低くまつたすすけた部屋に、なぜか杉山は臺ランプをつけてゐた。濠傍にのぞんで、見晴しだけは稍々よかつたが、しかしその六疊はうすさむそうな北向であつた。隣りの明るい日當りのよさそうな四疊半はおばあさんの居間であつた。

そのうすさむそうな北向の部屋で、陰氣な臺ランプの明りに猫背をまるめ乍ら、杉山は眼ばかり異樣に薄氣味わるく光らしてゐた。

「いつたいどうしたんだ！」

言ふまも彼は、なにか身に迫まるやうな幽氣に脅え乍ら杉山の顏色をうかがつた。年末蒲郡で遭つた時に比べると、杉山の顏はいちだんと血いろを亡くして、頰なぞまるでげつそりと肉らしい肉もなかつた。氣のせいか、ぜいぜいごろごろと咯啖の量も多かつた。

「ねえ、おれ、もうどうしてもなにか安心をもつてゐないと、辛棒が出來ないんだ……」

やがて杉山は途初れがちな言葉をついだ。

「安心てなんの安心だ」

「おれ、いろいろと考へたんだ……蒲郡もいいがね……しかしいつかへれるかあてのないのが、とてもたまらなかつたんだ……だいち友だちもないしね……それで、おれまた、學校へ行くんだ……」

「學校？」

彼は意外であつた。

「……つまり一握の藥なんだよ……せめて、學校を卒業するとでも言ふ希望がないとおれとても生きてられないんだ……」

言ひ乍ら、杉山は苦しげにぜいぜいどろどろつとねばつくやうな唾を吐いた」

「亂暴だよ！　そんなこと！」

しかし京作はなんとしてもそれに同意が出來なかつた。

「……君は第三者だからな、そんなことが言へるんだ……亂暴でも無暴でも、おれ、千兩札をにぎらないうちは死にきれないんだ……」

「千兩ざつ？」

「中學の免狀さ……もらつたつてなんのたしにもならないんだがな……もらはないであてなしにゐるよりは、せめてそれでもあてにしなきや、おれ、とてもたまらないんだ……試驗もうけるよ」

言ひ乍ら杉山はまたぜいぜいどろどろつと唾を吐いた。

「馬鹿！」

なかば彼はたしなめやうとところみた。このからだで學校なぞへ通つたら、ひとたまりもなからうとも考へた。

が、しかしそれを犯してまでも、なにかにすがらないではゐられない杉山の心境を押しはかつて考へると、流石に彼も身につまされないではゐられなかつた。死の影に追はれ乍らなほ一握の藁にすがらうとする人の世の焦慮、それを思ふと彼のかうべは自然に重くさげられた。

「……どうせ虫に喰ひつぶされるいのちだからな……」

言ひ乍ら杉山は突然またはげしく咳き入つた。

彼はもはやゐたたまらなかつた。聞いてゐると彼までが憂鬱に惹きこまれそうであつた。それを心機一轉させやうとところみ乍ら、突然彼は空元氣を出して話題をかへた。

「だいちこの臺ランプつてやつが不景氣だね。名古屋の眞中にねて少し舊弊すぎるよ」
「そをか……やつぱり、きみは健康人だな……おれは、おれのいのちはこの臺ランプにてうど相當してゐるんだ！」
ところが杉山は一向にその亢奮をすてなかつた。
「……どうだいこのたよりない明りの影は……おれのいのちもこんなものだな……」
言ひ乍ら杉山は益々きなこを氣味わるく光らした。
「君、少し狂つたな！」
つひに京作も手きびしくたしなめた。
「うん、狂つてゐるんだ！　誰れでもかまわない、早くおれに、安神立命を與へてくれないうちは、おれ、だんだん狂つてゆくんだ……」
が、杉山は益々尋常でなかつた。

「……だいち靈魂つて奴だな、あいつ一體亡くなるもんか亡くならないもんか、それが、おれ、氣になつてならないんだ……人間の肉體はプリズムだつて言ふ奴があるなそいつの說に依ると、靈魂の元來がどこか一つところにわだかまつてゐて、それがめいめいのプリズムを通過する時に、善人が出來たり、惡人になつたりするつてぬかしやがるんだ……プリズムが割れると、おれみたいに割れかゝると、そいつがまた元素に還へるつて言ふんだがな……おれ、どつちだつていいんだ！　亡びるものなら亡びる、亡びないものなら亡びないつて、早く誰かどつちかに決めてくれると良いんだ……おれの生きてるうちに、決めてくれるといいんだ……決まらないうちは、おれ、安神が出來ないんだ……」
そしていつになく杉山は兩頰をくれなゐに染めて、息をはずませ乍らなにか遠い虚空をぢつとみつめた。

なにとはなしに鬼氣あたりに迫るやうなかんじをうけて、彼は突然背筋の邊が慄然と粟つぶ立つた。

が、京作はそれ以上言葉を交へることに恐れをかんじた。なにをひとこと話しかけても、杉山はより益々亢奮するに違ひなかつた。むしろ彼は杉山のその尖り切つた神經に、これ以上觸れる愚かを繰りかへしたくなかつた。

「あんまり無理すんな。おれもちよいちよい來るからな」

そして一言言ひ殘すと、彼は挨拶もそこそこに部屋を去つた。

彌生の空はうすぐもりであつた。

心なしか彼には街のともし火までが、蠟ランプの光りのやうに、陰暗とうすぐらくかんじられた。

いつか彼は、なにものにともなく追はれるやうに、息を切らし乍ら、ひた走しりに

駆け出してゐた。

その翌日から杉山は言葉通り學校に姿をみせた。

しかし、病氣には勝てなかつた。二時間もつづけてやると、はたの目にも苦しげに呼吸が逼迫してみうけられた。

「ちよつと一時間すべらうか」

見るに見かねて京作は暗號の電報を席から席へ打つた。

「さんせい」

答へ乍ら杉山はすぐ席を立つた。

先生たちも薄々それを知つてゐるのか、或は全然彼等二人を手に負へぬ異端者とでも思つてゐたか、あまり深くは咎めなかつた。切棄御免の一札でも貰らつたかのごと

く大手をふり乍ら、彼等は殆んど一時間おき位には公然とその手をくりかへした。
學年試驗だけは、流石に二人も正確に時間を守つた。
幸ひと言ふか當然と言ふか、二人とも落第だけは免がれて、ともかくも無事進級することが出來た。
しかし、京作はひとり苦笑しないではゐられなかつた。もし學年試驗の中に童貞考査の科目も加へられてあつたら、無論彼は原級にとどまらなければならなかつた。知らぬが佛と言ふか、みずから彼はそれを省み乍ら、ひとり苦笑しないではゐられなかつた。

やがて春がまた來てあつた。

希望に輝くあらたな年は、先づ校庭の木の芽から人々に生長をもたらした。
道ゆく人のおもてには、一様にあらたな明るさがあつた。
その明るさのないものは只杉山と京作の二人だけであつた。かつてはクラスにあつて、なにかにとなく横道者の旗頭であつた彼等二人が、いつかクラスからは置き去りにされがちであつた。唯一人彼等の傍へ近づいて來る者もなかつた。指彈でなくてそれは明らかに嫌惡であつた。
しかしその直接な動機が、杉山の病氣にあることを薄々乍ら彼も耳に入れてゐた。のみならず人々は、終始京作が杉山と連立つてゐるために、彼をも同じ病氣と誤解してゐる傾がはつきりとみうけられた。
それを知ると、彼は年來のつむぢを曲げて、特に嫌惡をろこつに表はす誰彼を物色し乍ら、わざとこちらから近づいてやつた。いかにもその病氣らしくふるまつてやつ

た。

ところがその笑談から本當の駒が現れた。その頃になつて、なに故か彼は毎夜のやうに寢汗をかいた。ところなしかからだの節々が少し疼痛かつた。また夜になると決つて輕い咳になやまされた。

熱を計つてみると、意外にも三十八度近くあつた。

瞬間彼は、ぎくりとなつた。同時に杉山のぜいぜいごろごろと言ふ咯痰の音が、疾忽として耳元をかすめ去つた。猫背をまるめ乍ら、顏色蒼然と眼ばかり怪しく輝かし乍ら、

「……どうせ虫に喰ひつぶされるいのちなんだ……」

と言つた杉山の言葉が、隼のごとく腦中を閃き去つた。

「……どうだいとのたよりない明りの影は……おれのいのちもこんなものだな……」

と言つた臺ランプのことが、脈洛としてよぎり去つた。

つひに彼は齒の根も合はない程にうろたへ上つた。

そしてその夜一睡も寢もやらず轉々と反側すると、翌早朝眼色を變へ乍ら愛知病院へ赴いた。

杉山とは反對に彼がわざと下山博士の病院を選ばなかつたことは、見しりごしであるから、かつて杉山のために念じた同じ僞りを言はれるのが怖ろしいから、と言ふ理由ばかりではなかつた。むしろ同じ病院の同じ醫者を選んで、同じ運命に導かれる迷信的な脅えから、わざと彼は知らない愛知病院を選んだ。

が、それも今は果敢なくもおろかなそらだのみであつた。

「やつぱりおとうさんがわるかつたんですね」

醫者は豫診書をちらりと見乍ら、薄氣味わるい言を吐いた。

「そをです」

慄え乍ら彼もうなづいた。

「ほかに誰か現在わるい人がありますか？」

「友だちがひとり……」

「お親しいんですか……」

「ほとんど兄弟みたいです……」

醫者は暫く首をかしげた。そしてもう一度丹念に聽診器をあてがつた。わけても左の胸を精細に調べると、

「たしかにラッセルだな」

呟き乍ら、助手を顧みた。

「え？」

思はず彼も片唾を呑んだ。

が、醫者の言葉は冷酷であつた。

「ごく輕微ですがね。たしかにおわるいですな」

無殘にも彼はつひに左肺尖加答兒の宣告をうけた。

と同時に彼は天地がその場にくつがへされたかのやうな昏迷におちた。辛じて身を支へると、よろめき乍ら扉を排した。

そして彼はいつ藥をうけ取つて、いつ表へ出たか、それさへまるで記憶になかつた。來るときは明らかに歩いて來たものを、もはや彼にはあまりに大きな悲嘆のために半歩の歩行さへも出來なかつた。かすかにお伴を呼ぶと、蹌踉とし乍ら俥にのつた。

下宿へついてもまるで生きたこころもちはなかつた。その場にがばと身を伏せ乍ら、かすかに彼は忍び泣いた。が、やがて天に嘆き地に呪ひ乍ら、殆んど聲を放つて號泣

しないではゐられなかつた。

思へばなんと言ふ奇しきいたづらであることか！　きのうまでは人の身の上であつた。それがしかし今日はわが身の上であつた。虫、豪ランプ、杉山と同じ運命、それを思ふと彼は前後もなく身悶えしないではゐられなかつた。

が、しかし、彼は生きたかつた。生きられるだけ生きたかつた。死ぬまでは生き永らへたかつた。

そして、彼は敢然とし乍ら立ち上ると、

「おばさん！」

聲をあげて下宿の主人を呼んだ。

「屑屋か古道具屋をすぐ連れて來て下さい！」

また躊躇なく叫んだ。

「まあ、どうしたんです……」

眼をみはり乍ら驚いてゐるのを尻目にかけて、彼はその場にあらゆる荷物を部屋一杯に投げ出した。

ふとん、机、洋服、靴、毛布、書籍、それが今の彼に何程の足しにならうぞ！　生きる前には學業もさへ彼には何の未練も殘らなかつた。この禍ひが癒やされるまでは忌はしい病魔を驅逐するまでは、すべての絆を斷ちきつて海か山か清澄な土地に暫く身を引きたかつた。あらゆる雜念をふり切つて、鋭意靜養に努めたかつた。

が、その時彼のまなこは、部屋いちめんに散らばつた荷物に交つて、ビロードの肩掛が一枚同じやうに雜然と投げ出されてゐるのをふと見屆けた。見返へすまでもなくそれはかつてみずゑが彼から背き去つた夜置き忘れていつた品であつた。

「めんとうだこいつも序でに賣つちまへ！」

瞬間、彼は棄て鉢になつて、なんとはなしにそれを足蹴にかけた。が、次の瞬間異狀な興味にそそられ乍ら、ふとまたそれをかたわらへ取りのけた。

ふたたびまたいにしへの幸福を持ちうるかどうか、元よりはかない懐古であつたがせめて彼が健康時代の紀念品にそれだけはそつと秘めておきたかつた。

そして彼はその他の品を未練なく二足三文で屑屋に叩き賣つた。

その足で彼はすぐ杉山の居宅を訪れた。

「おい！」

彼は異狀に亢奮し乍ら、立ちはだかつたまゝで撃をかけた。

「どうした！」

「やられたんだ！」

「やられた？　どちらだ！」

「左りの肺尖だ！」

「そをか右か？……」

が、杉山はなぜか突然、眼を輝し乍らにやりと薄氣味わるいゑみを浮べた。

「とうとう君も臺ランプになつたな……」

そしてまた何物かを嘲笑ふやうに、滿面皮肉な色をあらはした。

「しかし、おれはもう學校をよすんだ！」

彼は躊躇なく決心の程を言ひ切つた。

「そをか！　いかにも君のやりそうなことだな……だがおれは、斷じてよさない……千圓札をにぎるまでは俥にのつてでも通つてやるよ……いい實例が二つ出來たな……ひとりは希望もなにも棄てちまつて生きてやらうつて言ふんだからな……ひとりはその希望によつて、長いきしやうつて言ふんだ……どちらが勝つかな……さあいきたま

「ー」

言ひ乍ら、杉山はまたなにか皮肉に堪えないもののごとく不氣味な笑ひを滿面に浮べた。

彼はその足でまたすぐと學校へ赴いた。そして彼の姓名はその日のうちに名簿から削除された。

しかし彼は決して蒲郡を選ばなかつた。そこを選ぶにはあまりに杉山の記憶がなまなますぎた。

その翌日、彼は文字通り身には何物をもつけないで、只僅かにみずゑか置き去つたビロードの襟卷に深く顔をうづめ乍ら、わざと蒲郡を通り越して、一つ先の御油の海邊へ只ひとり名古屋を立つた。

思へばなんのあてもないあきらめの旅であつた。鋭意病を養ふと言ふものの、療しうるか、療しえないか、それさへ彼にはあてのない旅であつた。脈絡とした寂しさが自然に心を閉ぢ込めた。不覺な涙がそこはかとなく兩の頬に流れおちた。

が、しかし彼は一端宿屋へ落ちつくと、もはや徒らに歎かなかつた。

先づ家鄉の兄に向つて逐一を正直に打ちあけた。事後承諾ではあつたがすべての納得を求めてやつた。

「カネノシンパイスルナ」

意外にも家兄はその日のうちに電報を打つてよこした。

そしてまた彼は、岐阜のみずゑだけにはそれとなく一切のおもむきを知らせてやつた。すでに結婚をしたものかどうかそれさへ皆目不明であつたが、しかし彼は通知しないではゐられなかつた。

「あなたまでがどうしたことです。いきます。いきます。すぐ看病にまゐります」

意外にもみすゑはまだ結婚してゐなかつた。あすにも看護にかけつけそうな返事であつた。

瞬間彼は喜悅のために、眼のうらが熱くなつた。會ひたさ見たさに怪しく胸が高鳴つた。

が、しかし彼はふたたび決然とそれをふり棄てた。完全に療り切るまでは、確實に生命の保證をにぎりしめうるまでは、すべての激情をかたく扉に閉ぢこめておきたかつた。

そのまゝ彼は一言も返事をかゝなかつた。なに故かみすゑからもまたなんの音沙汰さへなかつた。

そして彼は漫然と濱邊へおりた。

濱邊は春の陽にかげろひ乍ら、いちめんの砂地であつた。遠くかすんだ二つの岬に抱きかゝえられた内海の潮は、地平のかなたにかすかな潮鳴りを立て乍ら、日ねもすのたりのたりと汀を洗つた。

靜かに彼は裸體になると、窪地の砂地に身を投げ出し乍ら、長長と陽に背を向けた。ひたひたと心にしみる藻しほの香を吸ひ乍ら、いつまで　彼は起き上らなかつた。やがてまた仰向けに寢返り乍ら、おもてを包んで胸さきを陽に當てた。

そよとの風も起こらなかつた。

しぶきひとつ飛ばなかつた。

そして今、彼の心はなに一つ雜念に煩はされなかつた。

ところが五月まもなくのある日であつた。

その日彼は誰からであるか、差出人不明の重い至急親展をうけ取つた。

審り乍ら封を切ると、しかしそれはまぎれもなくみずゑの筆蹟であつた。

「……突然のことにてさぞかしお驚きのことと察しあげまゐらせ候。そちらへお出かけのおたよりうけてその日お訪ねいたすべく覺悟をつくりおり候ところへ、突然名古屋より昌平危篤の電報まゐり候。まゐり候とて所詮は死ぬべき運命に候へば、むしろそちらへお看とりにまゐらうかとも存じ迷ひ候が、血を分けたものの最期と思へばそれもならずその夜ともかくも名古屋へかけつけまゐり候。しかしそれも今はむなしきわざに候ひしか、昌平はその夜十一時二分にあえなくも事切れ候。僅かに祖母、叔父わたし、の三人に圍まれ乍ら、寂しき生涯を終り候。死にのぞみ乍ら特にこれたけは傳へまゐらすべしとて申し遺せしこと有之候へば、今はなにをかおかくし申すべき包みかくさずすべてをお傳へ致すべく候。昌平は最期までわたしひとりをひたすらに慕

ひおりし者に有之候。思へば三とせ前にも候ひしか、一夜彼よりはげしく迫られ候ひしこと有之、心にもなく許さうかとも思ひ案じ候ひしが、あまりに彼、わたしに近しすぎし者に有之候。すげなくも拒み候ため以來彼の言動はことごとに荒み候て、行末もどうかとそら恐ろしく候ひしが、それもいつかあなたをお見知り候ために打ち忘れるともなくふり棄てまゐり候。お怒りたまふな。日ごと夜ごとにひたすら思ひまゐらせ乍らも、昌平のこと不思議に心にかゝりおり候ひしが、昌平よりもまた日ごと夜ごとに慕ひまゐり、病ひを得候てからも、蒲郡へ移り住み候てからも、なほはげしく手紙にて迫まり候ひし程に有之候。

その後のことはお推察下され度、わたくし慕ひまゐらす心に少しも變り無之候。あの夜み心に背き候ておろかにも馳せかへり候ひしが、深く慕ひまゐらせ乍ら、なにしに結婚なぞ出來うべく候や、家人にさへかたくさからひ乍ら、日夜ひたすらに戀ひま

ゐらせおり候。もはやわたしになんの恐れも無之候。すべてを棄ててもお看とりに馳せまゐりたくそれまでは夢お暎きたまふな、この心だけでも必ず昔のおすこやかさに還へしあげまゐらすべく候。明日骨上げ、明後日家郷にて葬式の運びに候へば、濟み次第お訪ね仕度、御會葬のことなぞくれぐれも無用に候。死に逝く者よりおん身こそひとしほ御いつくしみなさること肝要に候」

そして手紙には棺の前にて、と書かれてあつた。

彼の歎きは、驚きと悲暎は、殆んど筆紙に餘るものがあつた。

「いい實例が二つ出來たな……」

言ひ乍ら杉山と袂を分つたのはほんの半月とたたない前であつた。

「……千圓札をにぎるまでは俥にのつても迫つてみせる……」

と言つた杉山が、その千圓札さへにぎらないうちに、あえなくも今、幽明の境を異

にしなければならなかつた。

「とうとう君も臺ランプになつたな……」

と言つたその一つの臺ランプが、今、無殘にも打ち碎かれた。

が、しかし、彼は不思議にも一滴の涙さへ落しえなかつた。

棺の前にて、と書き添えられたみずゑの手紙が若し事實ならば——言ふがごとくに杉山が悶々と彼女を慕つてゐたのが事實とすれば——突然彼は、五體に氷を浴びたごとく悚然となつた。

最後まで遂げられなかつたはかない思情、その思慕を抱き乍ら、悶々といのちを斷つた杉山を憶ふと、彼の心は吃然と正されないではゐられなかつた。

そして彼は、端然として正座すると、靜かに筆と卷紙を取つた。

「家出をなさることと無用のわざに候。心おきなく御結婚なさるべく、右篤とおすすめ

致し候」

筆力もみださないで、はつきりと書き了へた。

そしてまた日夜肌身はなさなかつたビロードの肩掛をも、同時に小包でみずゑ宛に送り返へした。せめてもそれが杉山に對する僅か乍らの餞（はなむけ）と思ひ乍ら。

やがて春は更けていつた。

京作はひとり濱邊に降り立ち乍ら、默々と背を陽に當てた。また默々と胸を陽にあてた。

そして彼はいつまでたつても、默々と口を開かなかつた。春が過ぎても、また秋が訪れても、默々と口を緘し乍らひとり背を陽にあてた。また默々と胸を陽に當てた。

——完——

母の上京

大よその覺悟はしてゐたつもりであつたが、イマタツアストヨハシマデムカイコイといふ電報を實際にうけとつてみると、私は急に母の出京に對して少からずこだわりを感じ出した。

一體母の上京說を極力すゝめたものは、正直に言つて私が最初の發頭人であつた。その問題が起きたのは去年の秋である。地震後會社がつぶれた爲に、自然私もお拂ひ箱になつて、さしせまつた年の瀨怕さに金策をたくらんでまた臆面もなく家鄉へ立ち歸つた時であつた。

父に死なれてからとかく身體の方もはきはきしないし、それに鼻は永年の痼疾でもあることだから、近いうちに思ひ切つて根本的な治療をうけたいといふ母の話であつた。就いては父親も卒中でぽつくり去つたとだし、それに見たとほり自分は人並以上に肥り性の方だから、いつまた父の轍を踏んでぽきりとやられないとも限らないので

手術をするなら前もつてお灸でもすゑておいて、中氣だけでも押さへてから治療にかゝりたいが、と言ふやうな話だつたから、お灸で中氣を癒さうと言ふやうな御信心がある位なら、思ひ切つて東京へおいでなさい。地震で駿ヶ臺は燒けましたが、東京には西洋のお灸をすゑる醫者は掃く程あるからいつでも御案內します。と言つたのが事の初まりであつた。

しかし元來が老人のことだから、初めはなか〳〵上京說に從はなかつた。地震後東京は物騷だから、と言ふのもその理由の一つであつた。濃尾の地震でこり〳〵だからこの上醉狂に東京までいつて、わざ〳〵地震なぞに遭はなくたつて、けつこう極樂へ行かれます、といふのもその理由の一つであつた。

が結局母の心持を詮じつめると、同じ療治をするならば、豐橋か名古屋かとにかく鄉里に近い所でやる方が氣丈夫だから、といふのがその眼目であつた。そんならなほ

のこと東京へおいでなさい。第一東京には私がゐるから、といふのが又私の意見であつた。

それで話がまとまつて、初めは十二月匆々に上京するといふことであつた。それがまたひるがへされて今度は正月匆々と言ふ話であつた。それがまたいつか有耶無耶に延期されて、三度目が今度の電報であつた。

しかし、上京が實際に確定されてみると、私はにはかに心中色々と狼狽をかんじ出した。

その第一は妻の問題であつた。元來私は今の妻を尋常な方法でめとつたものではなかつた。私が學校を卒業した年の秋である。極少量ではあつたが、突然私が喀血をしたことがあつた。初めての經驗であつたので、極少量にしろ、まのあたり血を見ると悉く私はうろたへ上つて最早餘命はいくばくもないといふ風に即斷を下したものであ

つた。

それ以前から同郷と言ふ關係で、互にいんぎんを通じ合つてゐたのが今の妻であつた。私は悉く狼狽のあまり、どうせ長生出來ないものなら、せめてこの世に最も信じられるものと十日たりとも同棲を遂げたうへで、殘念乍ら往生したいと言ふ意味を手紙で妻のところへ申し送つた。

その頃妻はまだ目白の學生であつた。外出さへ氣まゝには出來ない程の拘束をうけてゐる寮舍生活にあつた。妻はすぐにかけつけた。

「わかりました。わかりました。」

眼をうるませながら私にすがりついた。しかし、私の心は只暗澹たるばかりであつた。いつまで生きのびられるか。それを思ふと私はいたずらに焦つた。又それを知りながら、甘んじて私と同棲をとげやうと言ふ妻の心も同じく暗澹たるものに違ひなか

つた。

私たちは一刻も時間が惜しかつた。一日でもより早くその念願を遂げたかつた。そして私達は無謀にもその場に逐電の相談をつくつた。墓場を探して、と言ふよりは墓場にする氣で、まもなく私達は武藏野に一軒の隱れ家を構へた。

その後幸に私の身體は殆ど健康體に回復したが、しかし私達は妻の實家から、見事に勘當の刑罰をうけた。うけたことは少しの無理もなかつた。寧ろそれは覺悟の前であつた。

がしかし、そのいきさつをちやんと知つてゐる母親が、それを知りながら、上京するといふことは、また上京して私達一家に同居すると言ふことは、結局妻を承認すると言ふことに他ならなかつた。元より私の生家は誰一人私達の同棲に不服をとなへたものはゐなかつたが、しかし妻の實家に對してはなに程かの遠慮があるに違ひなかつ

た。妻の實家が私を夫として認めないのに、私の實家が彼女を妻として認めるといふことを柄について、少くともいく分の氣兼があるに違ひなかつた。

まして母親は世間體と義理以外にはなんの見識も持つてゐない一個尋常な老婆であつた。果して母が妻を公然嫁として遇して呉れるか、またその反對に妻が姑として母親になんの不自然さもなくよく仕へうるかどうか、それが私の大きなこだはりであつた。

しかしそれはまた私一人のおろかなる取越し苦勞と言へばいかにもさうに違ひなかつた。それよりもつと私のこだはりになつたものは母その者であつた。

私はどう言ふものか、わが母でありながら母親と性があはなかつた。第一うすぎたない年寄りであることが不愉快であつた。おそらく世に人の親となつて、二十六にも七にもなる倅をもつた母親で、年の寄つてゐないものは一も存在しないに違ひなから

う。だが私にはその年の寄つた母親が氣に入らなかつた。子供ながらほれ〴〵するやうな若い母親がほしかつた。それが若し誇張ならば、とにかく自慢にしてみたいやうな、品のいゝ母親がほしかつた。ところがわが母親は殘念ながら、うすぎたなかつたあまつさへまた口やかましかつた。その上に愚痴っぽかつた。父親を失つて以來、いく分ヒステリィ氣味でもあつた。どの點から解剖しても、どこに一つ好感のもてる部分がなかつた。それが自分の母親だけに、血をひいた肉親だけに、只輪廓を想ふだけでも、一意私は胸がつまつた。いづれ上京の曉は、東京見物もするに違ひなかつた。見物すれば自然私がお伴であつた。お伴をすれば人中へも出なければならなかつた。ところがわが母親は、うすぎたない年寄りであつた。

「これが私の產みの母です！」誰にそんな自慢が出來ようぞ！　只それを思ふだけでも、いちづに胸がつまつた。

それもしかじおそらくは私一個の利己的なわがまゝに違ひなかつた。それ以上私の氣になつたものは、私達貧乏の問題であつた。言ふもお耻しい話であるが、現在今私達は一升買ひも實際に覺束ない有樣であつた。

元より會社はつぶれたまゝであつた。職を失つたものは私ばかりではなかつた。就職難はどこにもあつた。高等遊民もさらにあつた。しかし身をおとすには、一介のその日稼ぎ人として身をおとすには、不幸にも私は病身であつた。少くともひゞの這入つたこわれ土瓶であつた。いつなんどき又咯血しないとも限らなかつた。

私は只呆然として自失するより他に道はなかつた。いつのまにか私の身邊からは、先づ時計が姿をかくした。少しばかりあつた本が賣り飛ばされた。澤山でもない衣服が次ぎ〴〵と典物された。妻の着物、元より勘當までされた妻にろくな着物のある筈はなかつた。帶一本さへ滿足なものがなかつた。しかしそれさへ月々典物された。は

ては學生時代の袴さへもいつか屑屋の手に渡された。

それほどに逼迫してゐる現狀に、母の上京は脅威であつた。かつては金策に行つた位であるから、また地震以來私が職を失つてゐると言ふこともちやんと家兄には了解がある筈だから、全然母を居候として上京させるやうなことは萬なからうが、こちらから上京をすゝめておいて、滯在中の食費まで母に支拂はするのは、何となく私に氣がとがめられた。少くともあさましかつた。尋常普通な見榮から言つてもそれ程までに落ちぶれた現狀をわが產みの母親にみせたくはなかつた。おそらく母には八年も十年も學校をやつて、いまだに一升買ひさへ覺束ないと言ふやうな生活の苦しみなぞは、所詮納得出來ないこと柄に違ひなかつた。

よしんば出來たとしても又出來ないとしても、無論差支のない話であるが、差し當り私には豐橋行の旅費さへ今は全く才覺が覺束なかつた。それが私を最も震慄させた

直接問題であつた。しかし電報まで打たれて見れば、おいでなさいと言つた責任からでも、たとへ七を八に置いても迎ひに行かなければならなかつた。

私は愁然としながら部屋中を見巡した。只あるものは背廣の一着であつた。それは私のいのちから二番目に大切な品物であつた。元より生地は只の紺サージであつたがたとへどれ程安物の背廣とは云へ、この世に月給を取つて生活する以外なんら特別の技能を附與されてゐない私にとつては、その紺サージ一着がともかくも私の表看板であつた。今こそ職に離れてゐるが、若しその一着を失つたとすれば、最早私は生存能力の大半を奪はれたも同然であつた。

だがしかし今となつてはその一着をさへ典物にでもする以外にはなんらまとまつた金策のみちがなかつた。

私は暗然としながら決心のほぞをかためた。

「おいまけるぜこいつを！」

ことさらそれを妻に言つたからとて元より埒もない話であつたが、ともすればおのれ自らうらめしくなり勝な心を無理にも引立てようとして私は、わざと妻の方へ誇張しながら宙にふつてみせた。

「そいつを？　だけどそれ、お侍なら大小ぢやないの？」

私の苦衷に察しがついたか、妻もにはかにそんな空景氣の笑談をつけながら、しかしまなざしをうれはし氣にしばたゝいた。

「お侍だつて時と場合にや腰の物さへ質に置く位のこともあるだらうさ。まあさう泣くな、泣くな」

そして、私は、誰にともなく泣くなと泣くなと呟きながら、その一着をくるくるツと風呂敷包につくつた。それから先は私の得意な擅上であつた。質屋の暖簾はたくみにくゞることなど、われながら全く手に入つたうまさであつた。

三ツ揃ひ十八圓しか附けられないと言ふのを、言葉たくみに二十三圓までせりあげた。

「あなたにはとても叶ひません」

言ひながら番頭はそつ齒をむいた。いつ見てもおさつの顔は決してわるいものではなかつた。

私は口笛を吹きながら、いそ〳〵と玄關から上り込んだ。

「まあ。ね、もう五分お出ましがおそかつたらさにあつたのに、をしいことをしたのよ！」

ところが妻は、私の顔をみるとたゞちに、なにかはしやぎながら口を切つた。

「なんだい？」

「來ましたのよ。デンボーガワセガ！」
「どこから？　トヨハシ？」
「いゝえ、お兄さんだわ！」
見ると爲替には一金三十圓と言ふ活字が押してあつた。無論豐橋行の旅費として家兄が惠んだものに違ひなかつた。
私は危うく涙ぐみかけた。金を呉れたからほめるのではなかつたが、私はわが兄の萬事奥床しい心遣ひに、實際涙ぐまないではゐられなかつた。何等それらしい豫告なしに、いささかも恩に着せがましいところなしに、萬遍なく心を働かすわが兄の態度が少からずうれしかつた。
「よし！　ちや、すぐ取つて來よう！」
私は雀躍して郵便局へかけつけた。

「くよくよすんない。金策萬事疎漏が易だ！　土産を買つてくるから、まつておいでよ！」
そして私は最早天下を取つたやうな氣になつて悠々と二三等急行にのりこんだ。
所定の宿に着いても日の出にはまだ大分間があつた。
足音で分つたと言つて、私が部屋へ這入りしなに、母はむくりとふとんの上へ起き上つた。
しかし母は私の顏を見ると言下に、
「まア東京へはどうでもよくなつたよ。半久保に流行る按摩があるつてこつたでな、灸だけすゑて貰つて歸らずかしらん」
一流の皿つぼまなこをしよぼしよぼさせて、突然途方もない駄々をこねた。

私はすぐと眉を寄せた。これだから私が言はないことではなかつた。萬事この通り出たらめな癖持ちだから、それが私には氣に喰はなかつた。その一言をきいただけで既に私は憎惡が湧いた。今でさへこの調子だから、東京へいつたらどんなになるか、しきりに先が案じられた。

私は默つて口を緘した。それにはまるで對手にならなかつた。

「十時の汽車で立ちますから支度しときなさい！」

簡單にそれだけ申渡すと、今母がぬけ出たばかりのふとんに、いきなりもぐり込んで、不敢私はねたふりをよそほつた。

「十時つて今日ひるまでに兄さまが出て來るんだからそんなわけに行かんよ。きんの一緒にやつて來て途中で用を足しとるんだでな」

しかし母はすぐと言葉尻を押へて、無理にも私を話對手におびきよせた。

兄がひるまでに來るなら來るで差支ないが、私には母のその話ずきが既にたまらなく不愉快であつた。おそらく何かべちやべちやと愚痴りたいに違ひなかつた。皿まなこをしばたゝいて、ヒステリじみた癇をあげて、うすぎたない眞采で、と考へると最早私は一も二もなくうるさかつた。本質的に不愉快であつた。

「牛久保とやらのお灸においでなさい！」

ふと投げやりな氣持になつて、いつそこのまゝ追つ拂はふか、と言ふやうな氣にもなつたが、しかし私はいつのまにかとろとろと眠むりついた。

二時近くになつて、兄はやつと宿へ着いた。

「爲替ありがたうございました」

のどまで出かかつたのに、しかし私は言へなかつた。兄も亦そのことには一言も觸れなかつた。送つたが關に合つたか、と言ふやうな顏もしなかつた。それだけに私も

默りこんだ。また默つてゐても兄には私の心持がちやんと了解つくに違ひなかつた。

「夜行がいいだよ」

「さうですな」

答へながら私は母の方へ夜行で立つ旨を言ひ渡した。

『夜行？　夜やなんかごめんごめん、富士が見えんでご免ご免』

ところが母はまた一流の異議を唱へた。晴れた晩なら、富士山だつて日本だつて、世界中だつてよく見えるから、とどんなに事をわけて言ひ聞かせても、母は頑として夜行を斥けた。

「ヒスヒス三期のヒステたよ」

私より兄の方が却てクスクスと笑ひ出した。

「ぢやまあ、年寄の氣に入るやうにするさ。お金これだけ渡しとくからな萬事いゝやうにやつてくれ」

やがて兄は言ひ乍ら、三百圓だけ私に手渡した。流石に私ははつと感じた。大金だから——なる程それも今の私にとつてはいかにも大金に違ひなかつた。がしかしそれよりも、私の現狀を知つてゐて、平然と金を手渡した兄の心事が氣味惡かつた。萬事いゝやうにやつてくれ、と言つた言葉のうらにはどうせお前も使ふだらうから、と言ふ意味もありさうであつた。疑つてゐるか信じてゐるか、私の現狀が現狀だけに、私は不思議な氣とがめがかんじられた。

しかし現金をふところへ入れてみると、急に私は氣が大きくなつた。所詮は人のものと知り乍ら、それでもなにか氣が浮き立つた。猪ノ腹を蹴けると言ふ言葉があるが實際おさつが腹を蹴るやうにかんじられた。

その時なに氣なく眼をやると、床の間に母の荷物があつた。それがしかも申分なく

田舍じみた信玄袋であつた。私は急にヒヤリとかんじた。その信玄袋を肩に背負つて猫背をまるめ乍ら皿まなこをしよぼしよぼさせて、東京の町なかをぽかんと口をあけ乍らやつてゆく母の姿がすぐ眼に浮び上つた。その母の先に立つて、若い身空で私がまたその信玄袋のお伴をしなければならないと思ふと、突然私は二の足がすくむやうにかんじられた。

それを今思つただけでも、いかにも私には辛棒がしきれなかつた。あまつさへ懷中には三百金があつた。それがしきりに私の腹を蹴つた。いきなり私は立ち上ると、默つてぷいと表へ出かけた。

あれかこれかと選んだ末で、やがて私は手頃な手提行李を一つ買ひ整へた。其まゝ一旦宿の前まで歸りかけたがその時ふとまた私は東京を出がけに受取つた旅費の三十圓がまるまるふところに殘つてゐるのに氣がついた。

とつおいつ暫らく宿の前でためらつたが、やがてまた私の足は自然に呉服屋の方へ向いた。

「二十三四の女向きで四三四十圓のものをみせて下さい！」

私は景氣よく聲をかけた。いつか私の頭の中では、三百圓と自分の金とがどちらがどうか境目がとれて所有權が曖昧になつた。やがて私の小わきには二反のかべお召が抱へられた。

「馬鹿だなあ田舍者にや信玄袋で澤山ぢやないかい」

私の這入つていつたのを認めると、母はすぐ小言を言つた。折良く兄は風呂へ行つてるすであつた。

私は物をも言はず信玄袋の口をあけると、内緒に買つた反物を底の方にしのばし乍ら、片ツ端荷物を行李につめかへた。

「なんだ反物ぢやないかや、いつ買つたやそんなもの」
女親は女親だけに、素早くそれを感づいたが、しかし私は一言も答へなかつた。せつせと荷物を移しおへると默つてぱちりと錠をおろした。
東京へ立つたのは、翌朝あさの八時何分と言ふ普通列車であつた。
刻一刻と東京が近づくに從つて、私の母に對する拘泥もまた刻一刻と高まつた。母はしかしまるでそんなことにはお構ひなかつた。五分とだまつてはゐなかつた。東京の大根は一本いくら位するのだとか、お湯屋の風呂桶は丸いのだか四角だかどちらだとか、次から次へ限りがなかつた。辨當を買へば買つたで、このお煮付は甘いとか辛いとか、赤せうがは紅で染めたのだとかどうだとか、いちいち地聲で話しかけた。果てはまたなんと思つたか、辨當をきてう面に半分だけ食べ殘しておいて、叮嚀にそれを網棚にあげた。

そのたびごとに私は冷汗をかいた。また一つとして好感が持てなかつた。今でさへこれだから東京へいつたらどんなだらうと想像すると、私は一意憎みが湧いた。
沼津、御殿場、山北、國府津と東京に近づくにつれて私の言葉も次第々々に突ん慳貪になつた。また益々冷淡になつた。
大船、横濱、大森、品川と東京が近寄るに從つて、最早や私はまるで母と口を利かなかつた。まるで赤の他人でゞもあるかのやうに、益々邪慳に振舞つた。東京驛へ迫り着くと、手提行李をひつたくるやうにしていきなり先へ飛び降りた。降り乍らホームの方へ眼をやると、人込にもまれ乍ら上氣した妻の眼が發見された。
私はいきなり身をひいて妻と母親とがなんと言つて初對面の挨拶するか、遠くからきゝ耳立てた。
「ずゐ分お疲れなすつたでせう」

しかし妻は存外平氣だつた。

「わしは汽車に醉ふたちだがのうし、今日は初めての所を通つたかげんかあんまり退屈もしなかつたわいのうし」

地言葉ではあつたが母も割合に碎けた態度であつた。

先づよしと思ひ乍ら、私も心ひそかに胸なでおろした。このあんばいならば、母と妻とは存外自然に氣が合ひさうにも考へられた。

がしかし、それはほんの束の間であつた。郊外行の省線にのると、すぐまた母の癖が初まつた。

「二重橋はみえんかいえ？　靖國神社はどこだいえ？」

前後左右をきよときよと見まはし乍ら、いちいち地聲で話しかけた。しかもそれがわが母乍ら「すぎたない老婆であつた。恥も外聞もお構ひない純然たる田舍者であつ

た。あまつさへ口やかましくべちやべちや喋舌つて、ヒステリぢみた地聲をあげて、私はまつたくベソをかいた。側にゐるのさへ氣がひけた。私はいきなり座席をはずすと無理矢理妻を對手にさせて、遮二無二人込みへもぐり込んだ。

しかし母は平氣であつた。

「ありやなに様のお屋敷だいえ。ばかにでッかい家ぢやないか」

と言つたあんばい式で、いちいち妻に話しかけた。そのたびごとに車中の視線がばッとこちらへ集まつた。

「これ私の母ぢやありませんよ！」

殆ど私は壁をあげて、誰にともなく辯解したい位であつた。

やうやうに家まで辿りつくと、私はいきなりお座敷へ逃げ込んで、妻と母とを無理矢理茶の間へおしこめた。

「なにから申しあげていいか、まあ色々とあれがお世話をかけます」
やがて母がやや眞顏らしい言葉つきで、しかしまるで意味をなさない紋切口上を述べ立てた。
「わたしこそ何からどあいさつ申しあげてよろしいのやら……なんでムいますけれど……あの節はとんだ御心配をかけまして……」
それをきた妻の方でも、まるで意味をなさゝうな紋切り口上を述べ立てた。
そして二人はすぐさま又普通の言葉に立ちかへつて、妻なぞ珍しく地言葉を交へ乍ら、さかんに何が話し合つた。
それをもつけの幸にして、私は固くお座敷に籠り乍ら、まるで母達には顏も見せなかつた。
手術の方も急ぐことは急いだが、少しでも早く母から解放されたいと言ふ氣持の方

が先に立つて、翌日すぐに診察をうける豫定を立てた。
醫者は新聞の廣告から出鱈目に牛込の戸樫と言ふ耳鼻專門の病院を選んだ。
しかしいざ出かけようといふ間際になつて急に母は髪を結ひたいと言ひ出した。元より私にも異存はなかつた。妻が案内役で近所の髪結へいつた。
ところが小一時間も立つて歸つて來ると妻は襖越しにいきなり兩眼をうるませながら、もうこりこりしましたと言はんばかりに、突然拜み手をつくつてみせた。
小聲で哀訴したところをきいてみると、妻がたつた一ぺんで母に愛想づかしをしたのも決して無理はなかつた。
髪結のところへ連れてゆくと、母はさも親げな親類の家へでもいつたかの樣な顏付で、時候の挨拶から初まつてこれは私の嫁ですが、一緒になる時少し無理をしたゝめ嫁の里から勘當うけて、今に日蔭者でこの近所に住んでゐるんですが、と言ふやうな

ことを先づ皮切りに一切合切お構ひなく洗ひ立てたさうであつた。のみならず產れはどこの國で伴が何人あつて、この嫁の配れ合は三人目の伴だが、その世話で今度東京へ鼻の療治にやつて來たと言ふ樣なことから、六年前初めて善光寺へ詣りに行つたとき、うつかり錢湯で轉んで手を挫いてからと言ふものいまだに右手が不自由でいらないが、と言ふやうなことまで長々と話したさうである。

「おつ母さん決してわるい人ぢやないんでせうけれど、もう二度とお伴はこりこりしました」

言ひながら妻は實際に愛想づかしをしたかの樣に身振ひさでしてみせた。

「馬鹿！」

私はしかし小聲ではげしく妻をたしなめた。萬々無理はないと思ひながら、今妻に逃げられることは私に大きな恐慌であつた。實を言ふと前日以來、妻と母との話し口

が割合に氣の合つた同志のやうに感じられたので、それを何よりの幸にして萬事母が滯在中は妻にお伴をさせるたくらみであつた。無理矢理にぬぐひつけて、私はたくみに責任を忌避する計畫であつた。

それが今妻に逃げられたとあつては、私は大きな恐慌をかんじた。

「文句言はないでさつさと出かける支度しろ」

そして私は遮二無二妻を叱りつけた。妻も不承不精に外出の支度をとゝのへた。

病院とは名ばかりで見たところ只の町醫であつた。その割に患者の數は多かつた。小一時間も待つてからやがて私たちの名が呼びあげられた。半白の後家髷をちよこなんと頭にのつけてゐる母親を促すと、私は萬事觀念しながら、導かれるまゝに診察室へ赴いた。

人々は一齊に私達の方へ視線を投げかけた。どのまたさしにも輕蔑と冷笑とが含ま

れてゐる様にさへ感じられた。

醫者はでつぷりとふとりじゝな五十がらみの貪慾さうな男であつた。ぢろぢろと母の方を眺めてゐたが、

「御病人はこちらですか？」

やがて器械的に聲をかけた。

「えゝさうです。母です！」

言ひかけてしかし私は慌てながら、母ですと言ふところだけ濁らした。所が母は遠慮もなくつか〳〵と回轉椅子に納まると、耳鼻專門の醫者を對手に、

「冷えるとどうも腰が痛いで、そつちもいくらか惡いと思ふだがね」

いきなり婦人病の相談をもちかけた。居並ぶ醫員や看護婦達から、突然さつと一齊射撃の視線にあつて、思はず私の顏がほてつた。たら〳〵と冷や汗をかいた。

「若い時分にゃ九人も子供を產んだでね、今頃そんな病氣が出る筈はないと思ふだがねえ」

しかし母は決してひるまなかつた。まるで恥も外聞もなかつた。

「少しヒスを起してますから、早く鼻の方をみてやつて下さい」

つひに私は居堪らなくなつて、無理にも苦笑を漏らしながら慌てゝそれをさへぎつた。釣り込まれるやうに苦笑しながら、やがて醫者は反射鏡を口に咬へると、型通り診察にとりかゝつた。素人目には亂暴とも思はれる程に無雜作な手附で、いきなり醫者はピカ〳〵光る細長い棒を鼻の中へさしこんだ。鼻からはたら〳〵と青みがゝつた膿汁が流れおちた。

檢診の結果によると、寧ろ手術は手おくれさへしてゐる位ださうで、幸ひ病室が夕方に一つ空く豫定だから、今日にもすぐ入院をして頂きたいと言ふ事であつた。

私は即座に贊成の旨を申述べた。しかしいざ入院となると、流石に私も母の胸中が察しられた。西も東もわきまへない東京のまん中へ連れて來られて、今日からたつた一人病院生活を續けねばならない身の上を思ふと、いく分親身の情がわいた。

私は先へ立つて洗面器茶器などと言ふ當座の必需品を買ひととのへた。また平生の生臭きらひをおもんばかつて、母のために特に味附海苔や時雨蛤のつくだ煮を二罐三罐買ひととのへた。居ぬきのまゝで雇つておいた附添ひの看護婦には、いく分でも母に好意をもたせるために、一かけの半襟をお祝儀に送つてやつた。

萬端の面倒をみた上で歸路につくと、しかし私は突然また懷中に兄からの委託金がまだ殆どまるまる二百五十圓も殘つてゐることに氣がついた。

質屋の暖簾がさつと胸中に閃き去つた。涙をふるひ乍ら、二十三圓で豐橋行の旅費をつくつた背廣のとがすぐまたそこはかとなく浮び上つた。

「お前ひとあし先へ歸つておいで」

私は理由も言はずに無理矢理妻をせき立てた。そしてすぐさま行きつけの質屋の方へ町を曲つた。まるまる二十五圓穴をあけると、流石に私も委託金費消の責任感に氣がとがめられた。人のものは俺のもの、親のものは俺のもの、兄のものも俺のもの、誰にともなく辯解し乍ら、強て私は理窟をつけた。

手術はその翌日であつた。

正八時と言つた約束の時間に間に合ひかねて、電車からすぐ車で駈けつけたときは既に母親は全身きりきりと毛布に包まれて、鼻と口とをのぞいた顏中全部くるくると繃帶をされ乍ら、いかにも觀念したかのごとく、ぢつと手術臺に横たはつてゐる所であつた。

眼も顏もない大きな芋虫ででもあるかのやうな母の姿を發見すると、流石に私もな

にか聲をかけないではゐられなかつた。
「おそつかつたなあ」
繃帶の下で答へ乍らしかし母もやつと安神を持つた樣な聲色であつた。
「ぢやかゝりませう」
言ひ乍ら醫者は立ち上つたが、私の側に妻が立つてゐるのを發見すると、
「奥さん大丈夫ですか？」
危み乍ら念を押した。
「えゝ！」
私も妻も同時にきつぱりと答へたのに、しかし醫者は、反射鏡を啣へてメスと鋏を兩手にしてから、
「時々驚いて倒れる人がありますからほんとにお二人とも大丈夫ですか？」

二たび私達に念を押した。男の私がなんで倒れやうかと言ふ樣な意氣込で私も即座に勿論と答へた。
では、と言ふやうな顏をし乍ら、見るまに醫者はちやき、ちやき、ちやきと鋏を上顎から口中に加へた。助手がちいさい熊手のやうなもので、力まかせに上顎を引つかけ乍ら、上向にあんぐりと齒ぐきが見える位に引つ張つてゐるところを、すかりとメスをひとあて加へ乍ら、又ちやきちやきとやつて棉花で生血をぬぐひとつては丁度看護婦が血の垂れおちるあたりへ、捧げ持つやうに當てがつてゐる汚物うけの中へ眞赤に沁みた血まみれの脫脂綿を殆どまるで器械的にぱつぱつと挾み棄て乍ら、またほんとに大丈夫ですか、と言ふやうなまなざしでちらりちらりと私達に一瞥をくれた。
人間事とは思へないやうなその殘酷な有樣を、私はぢつと息をころし乍ら、まばたき一つもしないで見守つた。

そこには只息の詰るごとき靜肅な沈默と緊張があるばかりであつた。私にヒステリイのうすぎたない母親を持つたなんの煩はしさもなんの拘泥もみぢんだになかつた。人の命の尊嚴を認めない器械的な醫者の表情と、冷酷無比そのものゝやうな助手の顔面と、そして只ちかちか光るメスと鋏と、人事以上の血みどろな殘虐があるばかりであつた。

手術は刻一刻と捗つた。母親はビクとも動かなかつた。まるで死人そのものゝやうであつた。上唇と齒ぐきとの間は、殆んど一寸あまりもあんぐりと大きな穴をつくつた。血いろと言はうか肉いろと言はうか、その穴全體はまるで眞赤にさゝくれ立つて殆どふた目とは見られなかつた。

しかしその途端であつた。メスと鋏を持ちかへた醫者は、ちらりと私達に一瞥をくれると、矢庭にのみをその穴に差し入れ乍ら、まるで無雜作に二つばかり、こつんと

つんと槌で叩いた。

突然、私ははッとし乍ら、思はず兩手で顏をおほつた。同時に私自身鼻の中へ、こんこんとのみの音色がしみ通つたやうにかんじられた。そして私はよろめきかけた。それを辛うじて支へ乍ら、つひに私は堪りかねて、いきなりドアを表へかけ出した。

それからおよそ三四十分も經つてから、母は青ざめて病室へ歸つた。妻の話によると汚物うけに膿汁が約一杯程も出たさうで、傷口は都合四針ばかり縫つたといふことであつた。

しかし母はその割に一向平氣さうであつた。青ざめた顏色こそしてゐたがすべて平生の母であつた。のみならず枕につくと、すぐに私を捕へて、

「お前も地震で困つとるづらが、これからさき一體どうするつもりだやあ」

何んと思つたか突然連絡のない小言をやり出した。側に居る看護婦は全然赤の他人